

八月興行

文樂座

人形淨瑠璃



座樂文 橋 ^四

一部 金拾五

爽涼と興趣の溢る、

八月の文樂人形淨瑠璃

お暑いさきで御座るますが、みなさまの御健康の益々お熾んなことをお喜び申上ります。

さて八月の文樂座は巨豪古叡大夫榮三文五郎をはじめ秀拔なる精銳ぞろひに名だたる大作を配列いたしたる今夏涼艶の唯一者で御座る。七月の東京、京都へ進出して、壓倒的人氣を轟ち獲て絶大の好成績を収め得ましたことは、偏にみなさまの厚き御支持と御聲援による賚で御座ります。茲に謹んであつく御禮申上ります。巨星の至藝、若手連の潑刺たる演技に涼艶躍る八月興行へさおはこび下さるやうお希ひ申上ります。

昭和六年八月一日

四ッ橋

文樂座

昭和六年八月一日初日

毎夕四時開幕

二日よりの

御觀覽料

- 一等椅子席 御一名 金二圓
- 二等席 御一名 金一圓
- 三等席 御一名 金五十錢
- 一等お座席 御一名 金二圓五十錢

一等お座席は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
 専用電話 七四〇八番
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座るますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目
 長三四九番
 電話一四四一

(44) 堀佐土



天来道者 大夫自本津夫夫

前 天来道者 大夫自本津夫夫 天来道者 大夫自本津夫夫

笑

藥

心

商

心

大井

心

中 傳 記 公 公 記 公

會

邦

心 內

清 本 太 司 記

心

心

心

本 司 記 太 司 記

十種

心

天来道者 大夫自本津夫夫

天来道者 大夫自本津夫夫

天来道者 大夫自本津夫夫 天来道者 大夫自本津夫夫



天来道者 大夫自本津夫夫 天来道者 大夫自本津夫夫

天来道者 大夫自本津夫夫 天来道者 大夫自本津夫夫

天来道者 大夫自本津夫夫 天来道者 大夫自本津夫夫

豫定時間表

前 生寫朝顏話

笑庵の傍より
大井川の段まで

笑薬の段
宿屋の段
大井川の段
（午後四時より四時四十分迄）
（四時四十分より
五時五十五分迄）

御食事時間 二十分間

中 攝州合邦辻

合邦内の段
（六時十五分より七時五十分迄）

御食事時間 二十分間

次 繪本太功記

尼ヶ崎の段
（八時十分より九時十五分迄）

御休憩時間 十五分間

切 本朝廿四孝

十種香の段
（九時三十分より十時三十分迄）

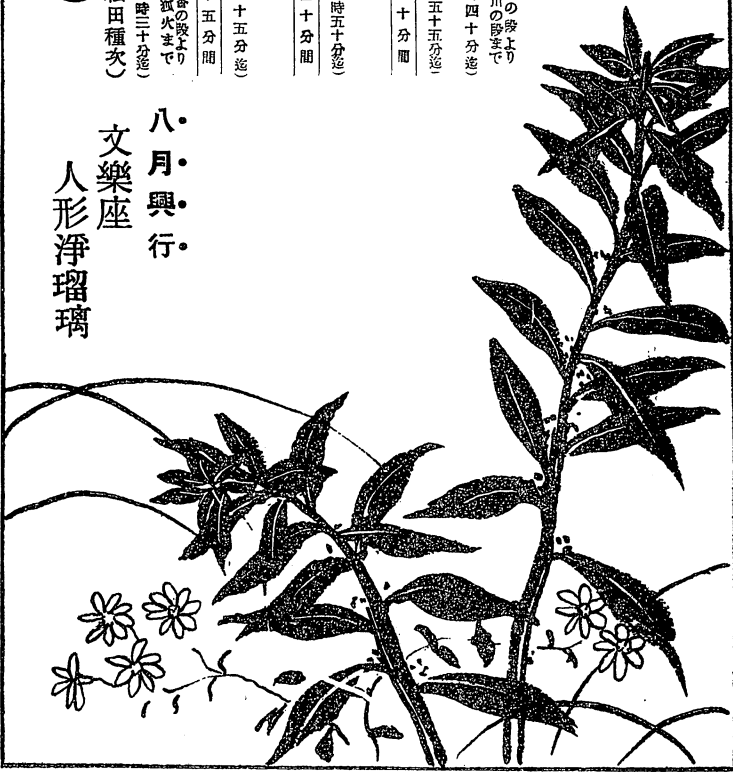
（舞臺意匠 松田種次）

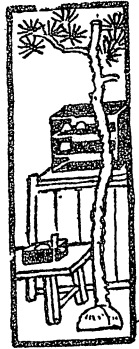
（左の時間は豫定につき日に依り多少の遅速は御諒承願上候）

八月・興行

文樂座

人形淨瑠璃





敵は師匠

義太夫旗上げの報は日ならず、京都の宇治加賀掾の耳を驚かした。かつては我が門弟であつてまだ嘴の青い若輩者の理太夫が、借上至極にも井上流でも宇治流でもない新派と稱する旗印を上げて、わが古淨瑠璃に對して反旗を翻へす不敵の振舞ひ、しかも己も名の義太夫節と名乗つて道頓堀のまつたや中に櫓を上げたその増上慢の鼻つ柱があり／＼に加賀掾の目にうつると、驚きよりも、一種名状の出来ぬ、不快の思ひに胸を

悪くした。實際のまゝころ、その頃の加賀掾は、氣は若い寄る年波には偽られず、自身の技藝の日に日に衰へて行くさまを自分自身あり／＼に知つてゐたので、心は焦燥つてゐるものゝ、それはどうすることも出来ぬ自然の理であつたけれども氣の短かくなつてゐる加賀掾は、義太夫が人を憚らぬ今度の振舞ひを、どうしてもそのまゝに見過ごして置くわけに行かなかつた。で彼れは深く心に決つて、老いたりさ雖も宇治加賀掾何條彼れしきの青二才に後れを取るべきやさいふ意氣込みで、遙々大阪出征を試み、道頓堀に櫓を並べて、いで一挫ぎに討ち平らげんと、こゝに二座對立の壯觀を呈することゝなつたのである。

時に貞享三年の春（異説元年の九月も）若い新進の義太夫と、古強者の加賀掾のこゝに端なくも戦端を開く事になつたのも、時勢の然らしむる處、亦止むを得ぬ成行であつた。加賀掾一座も大阪乗込みの報を耳にした義太夫の驚きは、加賀掾の驚きは又別なものがあつた。彼れは悲しみもし當惑もした。義を重んずる彼れさして、かりそめにも一旦は師と頼んだ加賀掾と鎧を削つて争はればならぬ今度の成行きを如何に嘆いたことか、而し彼れは涙を揮つて覺悟をした。いま若し心弱くも戦はずして師の軍門に降るこそば、曾ては神に誓つて大成を期してゐる、わが新興淨瑠璃を如何せん。藝術の前に

は最早何ものもない義太夫は堅く決心すると共に、片手では師を拜み片手には扇拍子をさつて、雄々しくも立ち上つた。日ならず、西の義太夫座に對して、東の芝居に宇治加賀掾の櫓も勇ましく上げられた。新舊兩派の興廢、かゝつて此一戦にありさばかり、道頓堀はなんぞなく殺氣立つた。

兩軍の陣容如何。先づ加賀掾一派は義太夫が常に近松の作を上演するに對し、當時文壇の飛將軍として文名隆々たる井原西鶴の作『曆』を以て火蓋を切らんすすれば、義太夫座はこれに酬ゆるに、近松門左衛門作るさころの『賢女手習並に新曆』をもつてした。かくてこゝに端なくも、文壇の兩雄も各自兩派に己が作を提

供して、偶然作者戦を演ずるの壯觀を呈せんさば、戦ひは正に白熱した西鶴の『曆』と云ひ、近松がこれに對して『新曆』と双方ともに曆を題材に取り入れてゐるのは、當時頻繁に行はれた曆の改廢さいふ事實を脚色したものだと思はれる、我邦に久しく用ひてゐた貞觀三年以降の『宣明曆』を廢して、貞享元年四月『大統曆』を使用したか、これも程なく同年十一月に至つて、ごうも完全でないさいふので、澁川春海の『貞享曆』が用ひられた。それが現今にまで及んでゐるのであるが、西鶴の『曆』とは想ふに『大統曆』を指しての命題ではあるまいか、また近松の『新曆』とは時にたま／＼再改正になつた『貞享曆』を當て込んで、速

かに加賀の座の曆に對して、新曆さ押つ冠せたのに相違はなく、藝題の上になで、既に新らしきをひらめかした、新進義太夫座の意氣、見るが如くに彷彿する。

さて、兩座の勝敗如何、哀れや加賀掾座は不評判不入り、さん／＼の敗北で、中途閉場の止むなきに立ち至つた。これに反して、義太夫座は美ご敵軍を屠つて、なほ餘裕綽々たるの概があつた。

無念の齒噛みをした老骨加賀掾は大童となつて、再度陣容を立て直し今度こそは目に物見せんさ響を鳴らして立向つた。さうして狂言も再度西鶴の作『凱陣八嶋』をもつて對したむ、此興行は背水の陣を布いて死物狂ひに戦つた故か、或はこの『凱

六十四歳を一 期

義太夫終焉と墓地

陣八嶋」の花々しい脚色も、滑稽味などの豊富なところも喜ばれたものか、前回とは打つてかわつた好人氣で、やつこ面目を恢復した。かうして愁眉を開く間もなく、悲運は何處までも悲運で、天この老藝術家に幸ひせず、或夜突然に劇場内から火を發して、劇場はもさより、人形、衣裳、諸道具に至るまで、すべて一塊の焼土と化せしめた。加賀掾の悲痛落膽、思ひ遣るだに哀れの極みである。さすむの老骨、もはや張りつめた我慢も挫げ、無限の恨みを呑んで京都をさしてすこゝと引上げて行つた。

宇治はその後再び大阪へは下つて来なかつた。

用明天皇職人鑑以後の十年、義太夫はひきついで、竹本座に出演してゐるが、記録はその上演狂言を左の如く示してゐる。こればもさよりの重なるものである。

『傾城反魂香』『心中二枚繪草紙』『兼好法師物見事』『若盤太平記』『曾我扇八景』『吉野忠信』『堀川波の敷』『緋縮緬卯月紅葉』『同潤色』『丹波興作』『酒吞童子枕言葉』『心中萬年草』『淀鯉出世灌徳』『五十年忌歌念佛』『梶狩劔本地』『今宮心中』『百合若大臣野守鑑』『心中及水朔日』『夕霧阿波鳴門』『冥途の飛脚』『吉野都女』『桶』『嫗女姥』『傾城吉岡染』『長

町女腹切』『天神記』『卒常磐』『大職冠』『相摸入道千匹犬』『娥歌留多』(以上近松門左衛門作)

正徳四年八月義太夫節開拓の大事業をあさにして、竹本座に於ける『娥歌留多』を上演中に一世の大藝術家竹本筑後掾藤原博教は、遂に六十四歳を一期として永眠の人となつた。

貞享二年、新派義太夫節を發表して以來、舞臺上の生活を續けること三十有餘年。その間、淨曲百三十餘番を語り、内新作狂言實に九十餘番の多きに及んでゐる。

門葉また多士濟々で、竹本派二世の棟梁、竹本政太夫、豊竹派の始祖若太夫を始め、老巧の陸奥茂太夫、美音の竹本頼母、内匠理太夫、竹本大和太夫、竹本難波、竹本文太夫、竹

本幾代大夫、竹本萬大夫、多川源太夫、長嶋重太夫、二つ井彦太夫その他。枚舉に違ひないが、寶永七年一月に作製された門下連盟状の人員を數へると、總員七十八名に上つてゐる。

送葬の當日には、白無垢姿の跣足の門弟老若擧つて五十四人首うなだれて棺側に添ふた。

生家は既に述べた天王寺村南堀越であるが、その後竹本座の道頓堀に近い、日本橋筋一丁目（千日前法善寺東門東（突當り））に居を定め、しかもそれが竹田出雲の宅と隣り合はせてあつたが、晩年は自分だけ別に、日本橋三丁目に住んでゐた。臨終の地は即ちこゝである。

墳墓は、菩提寺に當る天王寺の南

土塔山超願寺に現存してゐる。但し墓石は最初の物ではなく、文化十年その末葉竹本喜義太夫なる人が、百年忌追福の擧のあつた前後に建てたものらしい、さうして、碑面に刻まれた竹本の定紋が、ごうしたこまか竹田出雲の紋になつてゐる。（義太夫は鞠ばさみの中に九枚笹、出雲は竹の中に九枚笹）その他には、天王寺西門、納骨堂の裏に、寶篋印式の古雅な、筑後掾墓塔がある。これは高弟であり富裕者であつた豊竹若太夫が一個建立になる、師恩追慕の記念塔である。

木谷蓬吟著

文樂今昔譚より



笑藥の段

宿屋の段

豊竹辰太夫
竹本播路太夫
竹本龜久太夫
鶴澤叶太郎
鶴澤友作
鶴澤友二
竹本長尾太夫
鶴澤友平
鶴澤友若
竹本相生太夫
野澤歌助
野澤勝芳
早野澤清二郎

前
生寫朝顔記

笑藥の段より
宿屋、大井川まで

此の曲は山田案山子の戯號で近松徳叟が熊澤蕃山の作を傳へられてゐる。「露の干ね間」なる朝顔の小唄を原に想を構え「生寫朝顔日記」と題して竹本重太夫のために書卸したのであつたが上演に致らずして文化七年八月病歿した。それを翌年近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」として讀本に刊行したが非常に評判になつたので天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬らばしい人が添作して、大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、明石船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、

小瀬川、麻耶ヶ嶽、濱松、島田宿、駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱の五冊十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ、「生寫朝顔日記」であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遺子鶴澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し、外題の六文字は縁起が悪いと云ふので、「増補生寫朝顔記」と七字に改題した。それ故に今日流布してゐる正本は此の嘉永三年刊行のものが多い。この曲の筋は、秋月弓之助と云ふ九州邊の國家老の娘深雪が、京都在任中、宇治の螢狩で宮城阿曾次郎と云ふ美男の若侍と契を結び歡樂の幾日かを過す中になり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で

大井川の段

野鶴 野鶴 野鶴 野鶴
 澤澤 澤澤 澤澤 澤澤
 福太 福太 福太 福太
 彌彌 彌彌 彌彌 彌彌

竹本 竹本 竹本 竹本
 相生 相生 相生 相生
 太助 太助 太助 太助
 野澤 野澤 野澤 野澤
 吉彌 吉彌 吉彌 吉彌

人形

駒澤次郎 左衛門
 岩代多喜太
 朝屋徳右衛門
 萩野祐仙
 手代松兵衛
 笹代久藏
 奴關助
 川下女お越

桐竹政 幸
 吉田玉 松
 吉田玉 次
 吉田文 助
 吉田玉 徳
 吉田光 助
 桐竹紋 太
 大竹ぜい

本意ない別れを惜む。その際深雪は朝顔の唱歌を記した扇を後日の筐に阿曾次郎の船に投入して縛を解いた。其後阿曾次郎は仕官し駒澤次郎左衛門を改めて江戸へ出立する。一方歸國した深雪は男の事を忘れかれ本國を出奔して、都へ上る。男は去つたので、その行衛を追ふ中盲目となる。

駒澤となつた阿曾次郎は同役の岩代と共に東海道を下り、島田宿の戎屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したが、それと明さず出立する。後で知つた深雪は直ぐ其後を追つたが一足違ひで大井川は豪雨で川止となつたので、失望の結果入水して果てやうに死した時、戎屋の亭主と下部の關助が駈けつけて助け、戎屋の亭主は深雪が祖父の家臣と云ふ事が解り、駒澤

が惠んだ眼薬は甲子生れの人間の生血で調劑すれば癒える云ふので、甲子生れの亭主が切腹して、それが爲めに深雪の眼が開く云ふ内容であります。

(床本) 笑薬の段 (前)

行空の雲の足より雲助が足並早き東海道傳馬人足歩荷物吸付け行たばこさへ五十三次打續く中に取分け賑はしくおじやれが髪も嶋田の宿の所名うての内證よし名さへ戎屋徳右衛門、老舗も廣き十間門口店は買札講印かけ渡したる緩簾も風にひらめき吹付ける、繁昌たぐひなかりけり、せはしき中にもおじやれ共何かな油を寄り舉りナントお鍋ごん此頃旦那さんの世話にさしやんす朝顔と言目

くらアリアマア惜い器量じやないか
 いの併しこちの旦那様も身に引替て
 の深切はごうやらくさいものじやぞ
 やチ、何のいふ何ほこま付ても提
 灯で餅埒の明かぬ事ぢやはいのや夫
 れはそうごお泊りのお侍様一人の
 お方は意地の悪そふな顔付モ一人の
 お方はア、能い男じやわしやアのお
 侍様には真からそこらほの字ご
 ナホ、れの字お茶よたばこ盆よご氣
 を付て持て幾度持前の具焼すへ膳し
 たさじやにそしらぬ顔の其しんきさ
 是もほんのあわびの貝の片思ひノウ
 小よしごの何さそふではないかいの
 こ一つに寄るご男沙汰下女の習ひぞ
 かしましきのれん押上手代の松兵衛
 立出でヨツト聞たぞく、コリヤお鍋
 其様に廻り遠ひすへ膳よりちよつご

手をかしやくアレ又松兵衛殿いや
 らしいそんな事はこちやきらいじや
 わいの何じやきらいじや其又きらい
 な者が貝やきじやの鮑の貝の片思ひ
 のさなせいふたそれのみならず親方
 の悪口までア朝顔に氣が有げのイ
 ヤ提灯で餅じやのさ口から出次第よ
 ふ言ふたな旦那へ此通り告るぞよ、
 アコレめつそふな松兵衛殿そんな
 事告てよいものかいのふイヤく告
 るく告てこますぞ何ごそこが物
 も相談じやイヤコレお鍋旦那へ告る
 がいやならば松兵衛山の松茸ご其片
 思ひの鮑ごを焚出しにしてくれるな
 ら何もかも沙汰なしにすますごふじ
 やぐごしなだるれば勝手口より徳
 右衛門此体見るより立出でチ、コリ
 ヤ女子供又してもく小影へよるご

わつけもない松兵衛も嗜めくや、
 そればそふご朝顔はまだ來ぬそふな
 來たらばちよつごしらしやイヤナニ
 松兵衛奥のお客様は大内様の御家中
 明七ツのお立なれば家具も取かへ手
 廻し仕ておきや女子供も合點カドリ
 ヤ奥へいて窺ふ松兵衛おじやご徳右
 衛門人を遣へば後先に心を奥の座敷
 へご手代引連れ入りにけり。かゝる折
 ふし奥の間より立出る萩の祐仙イヤ
 コレ女中奥のお客は武家方そふな印
 の紋は大内桐定めて山口の家ち衆な
 らん名は何と言ますぞハイたしか大
 内の御近習駒澤様今お一人は岩代様
 こやら聞きましたム、成程そふで有ふ
 イヤ大儀ながらこなた衆は奥へいて
 岩代様に萩の祐仙ご申者チト内々に
 て御目にかゝりたひご言てくれまい

か、ハイ／＼それはお安い御用ドレ
呼まして上ませふと二人は立ち入に
けり。斯さ知らせに岩代多喜太一
の内より立出れば夫さ見るより頭を
下コレハ／＼岩代様先づもつて御健
勝で、チーコリヤ珍らしい萩の祐仙
某に逢たいさハいか成事ぞサレバ
／＼先達での御状には新参の駒澤が
諫言にて殿には御本心になられ連八
殿の最期のよし則ち玄蕃様より此御
状さ渡せば受取一見しチー大儀／＼
身共さて何かに付て邪魔に成は駒澤
め何卒密に害せんさきのふ街道にて
芭久藏さいへる浪人を連歸り委細の
工み申付早速奥の下家へ忍ばせ置た
やそれは味し／＼か、もしも其手で
いかぬ時には下拙む手製のコレ此し
びれ薬薄茶にまぜて吞す時は一夜む

間は死人向然ム、夫れこそ幸屈竟
併し小しやく者の駒澤め心見なくて
は食ふまいナツト其氣遣ひは無用々
々コレ此丸薬は則下薬是を先へ吞
置けば少しも酔はざる大妙薬時に岩
代様申さぬ事は聞へませぬが首尾よ
ふ參れば御褒美をづ／＼しりさいた
きさふ御座りますわいチーサ／＼夫
れにぬかりむ有物が事成就の其上は
いつかごの褒美なれ共是は先づ當座
の印ミ懐中より金一包差出せば押
たゞきコレハ／＼忝いして駒澤めは
何れの間にチーサかれは先刻公用に
つき村役人方へうせたらればナソレ此
間に件の妙薬某は奥の間にて山岡
殿へ書面をしたいめん其方も手つが
ひ致して後より來やれ祐仙さ詞つこ
ふて立上り岸に曲れる岩代は一間へ

(床本) 笑薬の段 (奥)

M 後に祐仙獨り笑味ひぞ／＼當座
の褒美が先捨兩さらば是から薬のし
かけさ言ひつ、傍り見廻して件の薬
を湯の中へそつさほり沃蓋びつしや
り斯して置て駒澤が戻り次第にふり
立て我等が先へ腹加減解薬の力でし
いらしん駒澤めは忽にぐにや／＼
／＼／＼／＼薬の功能こいつはよつ程
ふい／＼味いは／＼／＼悦び勇む
其處へ奥よりいきせき下女お鍋、申
／＼奥のお客様がお待兼早ふ／＼こ
せり立る聲に恠り祐仙はそしらぬ顔
でエヘン奥へ入る始終窺ふ徳右衛門
そつこ立出後打なむめ最前から聞て
居れば何やら怪しいアノ薬駒澤様へ
申上ふかイヤ／＼夫れでは却て當

り障りハアゴふそよい思案が有そふ
 なものじやチソレヨ昨日松原で買
 て置た笑ひ藥此湯をかへてチそふ
 じやんく斯して置てまさかの時はチ
 ットよしこ心でうなづき徳右衛
 門勝手へこそは入にけり。早夕暮の
 いそがしく膳部の運び寢道具を間毎
 く燈す灯のきらをかざりて駒澤
 治郎左衛門春高旅中ながらも武士の
 行儀くづさぬ羽織袴家來引連立歸
 る。待もつけたる岩代多喜太一間の
 内よりのさばり出ヤコレハく駒澤
 氏お早いお歸りシテ要用は相済みま
 したかいかに殿様御歸國先觸れの
 手着庄屋代官に申付思はぬ障入嗚お
 待兼ねナンノく旅くたびれもおい
 さひなく宿々のかけ引イヤモ御苦勞
 に存じます。エ拙者も何かなぞ存

する所へ國元にて呢懇の醫者萩の祐
 仙と申もの當宿に泊り合せ先刻斗ら
 ず對面致せしにこやつ殊の外茶好み
 にて道中にて茶箱を持参し相樂し
 みおるこの事貴殿にもお好きの道何
 き一腹呑でおやり下されまいかヤそ
 れは風流なる心わけしかし我も人も
 旅草臥所望致すも何さやらテ扱いら
 ぬ御遠慮薄茶一腹所望致せばこそ彼
 も好の道でござれば何の草臥ないこ
 ひませふひらに一腹おつき合下され
 いさおのび工みの押付藥無理にすゝ
 むる其内に時分はよしと萩の祐仙茶
 箱携へ心に笑みわざこぼけて手な
 つかへ、コレハく岩代様先程は誠
 に失禮してあなた様はチサ其節お
 噂申た駒澤氏イヤモ文學武藝は云
 ふに及ばず何一つ拔目はなけれど生

付御遠慮深いお人され共元より茶の
 道には御熱心ヤ幸是に湯もたぎり
 有ナツレ薄茶一腹サ所望だくハハ
 コレハく中々あなた方へあます様
 な茶ではござりませぬご御所望さば
 身の面目苦しからずは何腹成さ召上
 られ下されふご追従たらしく立上り
 茶箱取出し毒藥の工みの裏流かゝれ
 し共しらぬ手前のしかつべらしく振
 立て差出せば岩代は詞を正しイヤ駒
 澤氏お取次所へヤレ先々暫くさ徳右
 衛門恐れなむらさ座敷に出障りなが
 ら旦那様もいかやばししい申事ながら
 譜代お出入りの殿様の御家來たるあ
 なた方私方で煮焚のものは此度
 限らず吟味に吟味を致した上差上ま
 せれば千に一つ齋相がござりまして
 は此徳右衛門め越度泊り合したあ

なたのお茶サ御如才の有ふ様はなけ
れ共めつたにはナ申さ目顔で知せば
岩代多喜太ヤアいらざるうぬがさし
出身が入魂の萩の祐仙茶に毒薬でも
仕込有りさ疑ふての申條かアイヤ
全く左様ではござりませれども、然
らば何故差留た駒澤殿の手前さ云ひ
サ今一言言つて見よ眞二つに打放す
さきつば廻せば祐仙押留アイヤ先
々お待下されませエ、貴公様の御立
腹は御尤なれど徳右衛門の申所も
又一理有ヤ斯致そ下拙が毒見仕り
其上にて駒澤様へさし上ませふ何ぞ
徳右衛門それで言分は有まいなイヤ
モ御自分にお毒見なさるゝ程造な事
はござりませぬチーそふ有ふ〜が
其替り何事もない時は其分では濟さ
ぬが合點じやのヤモ夫れば是非に及

ひませぬ御存分に成ませふムー、
、ヤ面白〜きつと詞をつがふ
たぞよドレ毒味を茶碗取上そつと
解薬を先へ吞さあらぬ体にて件の薄
茶等も残さず吞下して徳右衛門ちよ
つあれハサ見たか徳右衛門此通りじ
やサ是でも別條が有か徳右衛門ごふ
だハイヤモ私かそ〜う眞平御免下さ
りませふ何じや御免下さりませふ
〜も氣が強いはいヤイ徳右衛門戎
屋徳右衛門サマゑび徳奴サ約束じや
夫へ直れそれへ直れ〜プ〜ハ
、約束ぢや夫へ直れ〜ハ〜フ〜
ハ〜、エ〜おかしなぞ〜エ〜
〜ハ〜、何じや知らぬがむせう
におかしく成て来たプ〜ハ〜ハ
〜ハ〜、コリヤ〜祐仙笑ふて斗りいす
さ早く駒澤殿へ差上てよかるふぞハ

〜ハ〜成程〜プ〜ハ〜只
今差上ますフ〜ハ〜暫く〜お
待下されハ〜ハ〜ハテめんよふ
なハ〜ハ〜いま〜しい程おか
しいはいハ〜ハ〜ハ〜ハ〜コリ
ヤたまらんワハ〜ハ〜アハ〜ヒ
〜ヤイ〜たはげ者めおかしく
もない事をげらん〜笑ひ身共は格別
駒澤殿へ無禮で有ふぞハイハ〜ヒ
〜左様にお腹は立られなハ〜拙
者も笑ふまいと存ずれどホ〜ハ
、何が腹の底からブツ〜
と涌出る様に成て来て〜ハ〜
ハイ〜もふさまりました〜只今
茶を立まするアイヤもふ〜
ひませぬ大丈夫です笑はんぞ言たら
ごんな事も有ても笑はんぞドツコイ
拙も萩の祐仙傳り乍ら恐れながら去

ながらドツコイ何のちいよんちよ
 さいなドツコイシヨくプロハ
 ハハハア苦しいイヒハハ
 亭主く此傍に醫者はないか醫
 者はハハ横腹へつらばるはいアイ
 ターまさしく是は笑ひじやく言
 ふものかアイタくハハハハ
 早く醫者をよんでくれ醫者も醫
 者を頼むはごふかコウひきよふな様
 なれどナニ同商賣は相見互ひぢやア
 苦しいく息がはづむアハハハハ
 ハハハコリヤくたまらんく
 へへ臍もよれる、ごすり替へた薬
 さいざしらす果は茶箱も踏ららし
 笑ひ入こそ正体なき姿にあきれ岩代
 多喜太はかる戎屋徳右衛門おかしさ
 かくす斗りなり短氣の岩代ぐつこせ
 き上ヤア大たはけの萩の祐仙笑ひ止

すばウマ手は見せぬミカ身がへれば
 悔りしながら手を合してもごうらぬ
 笑ひハハハめつそふなくごうだ
 くハハ御チホハハチホハハ簡ム
 ハハハアハハハ記る詞もあやちな
 く笑ひ薬の利目とは知らぬ祐仙息は
 づませ轉つ笑ひつハハハ逃て行案
 に相違の岩代はあきれ果たる佛頂顔
 エ様々の馬鹿者にかり湯に入るを
 忘れて居たヤイ亭主めうぬよく邪魔
 をイヤサきりく風呂場へ案内ひる
 げこそれ共得言すむしやくしや腹席
 を蹴立て廊下口後に心を奥の間の我
 座敷へ駒澤も座を立てこそ入にけ
 る。

(床本) 宿屋の段より大井

川の段まで

M 何國にも、暫しは旅さ綴りけん

昔の人の筆の跡、徒然侘ぶる假の宿
 夜の襖の透洩りて、風に瞬く燈火の
 影も淋しき奥の間へ、立歸る治郎左
 衛門。何心なく座を占めて、不圖目
 に付く衝立の、張交の歌讀下し。
 エ心得ぬ、此の貼交の地紙の歌は
 先年山城の宇治にて、秋月も娘深雪
 扇に某も、又逢ふまでの僅にこ、
 書いて與へし朝顔の歌。其後圖らず
 明石にて、船繋りせし其砌、琴に合
 はして深雪が節付け、折節思はぬ互
 の出船、飽かぬ別れを悲しみて、女
 の手づから、我船へ投込みし此扇。
 然るに今又此家にて、思はずも此張
 交ぜ、ア何者が諷ひ傳へて、はから
 す東の驛路に、見るも不思議さ獨言
 其折からの忍ばれて、詠め入つたる
 時しも有れ。襖押開け徳右衛門、小

腰屈めて入り来れば、此方も扇押隠し。オ、亭主、先刻は扱々きつい働き、危き難を通れしも、全く其方が志、サア是へ。ハ一冥加に餘る御言葉、エ、最前此方へ参る砌何か三人密々話、合點行かす忍び聞けば、痲痺藥を茶に交て、彼方様へ差上げんまの、ア、コリヤ、サアマ恐ろしい巧み、エ、憎さも憎し、直に申上げうさは存じたれど、夫でばどの様な科人が出来うも知れぬぞ存じ、へ、幸ひ先日懇みに求めました笑ひ藥、ヤコレ幸ひま、痺れ藥さ取替へたを、知らずに呑んだ先刻の時宜、此後とても旦那様、御油断は成ませぬぞ。ホ、其儀は某も疾く承知致した、マ夫は格別、此衛立にある朝顔の唱歌は、何人の手跡、

何いふことか御身が手に入りしぞエ、夫でござりますが、其歌についてマ哀れな話。エ、元は中國邊歴々の娘さうなが、何やら尋れる人が有るさて、親元を家出し、夫より方々流浪の上、果はさうく目を泣瀝し、跡の月までは濱松邊に、其歌を歌ふて袖乞ひ、所に又國元から、所縁の女子が尋れて来て逢ひました、其女も程無う病死、夫から又獨ぼし、此邊まで其歌を歌ふて歩きましたが、何が盲目でこそあれ、器量は良し、聲はよし見る程の者がいちらしがり、朝顔々々と言ふて、其歌を知らぬ者ばござりませぬ。私もあまりの不惑さに、此宿に足を止めさせ今では宿屋宿屋の御者の伽、何さまア不仕合せな者も有るものでござり

ますと、涙片手の物語も、心に舞々應ゆる胸澤、若し言交せし我妻かこ轟く胸を押鎮め。ム、夫は扱々いな話、身も今宵は何とやら物淋しい鬱散の爲其女を、呼寄する事はなるまいか。イヤモ何が扱て易い事、只今呼びに遣はしましよ、御慰みに琴か三味。ム、何分宜きに頼み入るも云ふば仔細の有るぞとも、知らぬ佛氣徳右衛門、尻輕にこそ立つて行く跡へ相役岩代多喜太、のさくご座に直り。ヤア駒澤氏、囁御退屈でござらう。コレハく岩代氏、殊の外お早い事でござるぞ、上へは解けても解けやらぬ、前垂掛けの下女お鍋、次の間に手を仕へ、申し、只今朝顔殿が見えました、是へ通しましよかいな。ナニ朝顔さばそりや

何者だ。アイヤ、此道中で琴三味を
 弾き、旅の徒然を慰さむる譬女さや
 ら、拙者も何か物淋しうござれば、
 ちこそ琴でも聞かふこそ存じ、亭主を頼
 み呼寄せましてござる。アイヤ夫や
 止めなさい。トハ又何故な。サレ
 バサ、先刻身共が知音たる萩野祐仙
 同席如何と云はれた貴殿、乞食をば
 座敷へは通されまいかい。ハテ高の
 知れた盲目女、萬更怪しい、ナソレ
 茶箱も持參致すまいと、しつべい返
 しにきつくりと、言句に話れば滅す
 口。アア左程御所望ならば兎も角
 も、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出
 し、琴なご三味なご、弾かし召され
 て、早く此場を追返されよと、飽ま
 で意地持つ執拗者、寄らず障らず駒
 澤が、差圖にお鍋は心得て。 朝顔

殿召しまする、朝顔殿々々と呼立
 つる。むざんなるかな秋月の、娘深
 雪は身に積る、歎きの數の重りて、
 晴失ふ目無鳥。杖柱こそ頼みてし
 漆香は脆く朝露と、消残りたる身一
 つを、遠に捨ても縁先の、飛石探る
 足元も、危なき木曾の丸木橋、渡り
 苦しき風情にて、漸々座して手を仕
 へ。 召しましたば此お座敷でござ
 りますか、拙い調も御笑ひ種、おほ
 もじ様やご會釋する、顔も深雪の成
 れの果、不慮の者やご急り来る、涙
 呑込みひかへ居る。岩代は夫ごも知
 らず。 ヤア見苦しい其形で、我々
 が目通りへうせせば、ム、聞及んだ
 朝顔めな、エ、いきり、立つて失せ
 居らう。アイヤ、岩代氏、さうも
 ぎごうに仰せられな、此方に呼寄せ

たればこそ、思ひ掛のう、アイヤ思
 ひ掛け無う来た者を、叱るは武士の
 情に非ず。コリヤ、女、大儀なご
 ら其朝顔さやらの歌、サ、早う歌ふ
 て聞かせいご、望む心は千萬無量、
 知らぬ岩代煩賑し。 扱々駒澤氏に
 は、イヤモ強い御熱心だはい、コリ
 ヤ、盲目、何なりごも、エ、歌へ
 く、サ、早く、ハイ、ハイ、ハイ
 歌ひまするでござりますと、焦る、
 夫の在るごごも、知らぬ旨の探り手
 に、戀故心盡し琴。誰かは憂きを斗
 爲吟の、絲より細き指先に、指爪さ
 へも八ッ橋の、寢れ果てたる身を啣
 ち、涙に曇る爪調べ。 ウタ、露の干ぬ
 間の朝顔を、合照す日かげの難面き
 に、合、哀れ一むら雨の、はら、ご
 降れかし。 ム、夫を慕ふ音律の、

我々が身にも思ひ遣られて、思はず感涙致した、のう岩代殿。如何様、琴を謂ひ器量と謂ひ、イヤモ中々感心仕る、てイヤナニ朝顔とやらそこは定めて冷えるであらう、身ごもが傍で今一曲、サアく所望だく、ア、イヤく岩代殿、最う許して御遣りなされい。去さては駒澤氏、身共望みを止めさつしやるはソリヤ意地が悪いと申すもの、イヤさうではござられぬ、彼女も定めて疲れませうと存じて。ハ、アヤ然らば曲は止めにして、コリヤく女も汝もはらからの非人でもあるまい。身の上話も亦一興、話して聞かせヨ如何だい。ハイく能う聞うて下さりませ、すお言葉にあまへお話し申すも恥しなむら、元私は中國生れ

様子あつて上方住居、すぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、これかよるべの蟹狩に思ひそめたる戀人さ語らふ間さへ夏の夜の、短い契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ國の迎ひ。親々に誘はれ浪花の浦を船出して、身に盡したる憂思ひ、泣いて明石の風侍に、偶々逢ひは逢ひながら、つれなき風に吹分けられ、國に歸れば父母の、思ひも寄りぬ夫定め、立る操を破らじと、屋敷を抜けて數々の、憂目を凌ぎ都路へ、上つて聞けば其人は東の旅に聞く悲しさ。又も都へ迷ひ出で、何時かは巡り逢坂の、關路をあさに近江路や、美濃尾張さへ定めなく、戀しく目に泣き潰し、物の文色も水鳥の、陸にさまよふ悲し

さは、何の世如何なる報にて、重々の歎きの數、憐れみ給へさばかりにて、聲を忍びて歎きける。テ扱哀れな話、併し男日早も無い世界に、マ氣の狹い女だな、イヤもうしゆんだ話で氣が減入つた、寢酒でも食べ氣を晴さう、イヤナニ女、暇を呉る立歸れ。ハイく有難うござります左様なれば御客様、最う御暇申します。オ、朝顔とやら大儀であつた、初めて聞いた身の上話、若し其夫が聞くならば、嘸満足に思ふて有る。ノウ岩代殿。左様々々。ハ、ア是はマア御親切なお言葉、有難う存じませ、杖探り取り立ちながら、虫が知らすか何さやら、耳に残りし惜の詞、名残惜しさに泣くくも、心はあさに探り行く。折節奥より若侍

最早餘程深更に及び候、御兩所にも早やお休み。如何様、明日は正七ツの出立、イザ駒澤氏お休みなされぬか。イヤ拙者は今暫し用事もござれば、御構ひなく御先へ、左様なれば御先へ臥せらう、ドリヤム、イヤ御免下されさ、立上りしむ、胸に一物、心をあさに奥の間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遅しと駒澤手を鳴らして女を呼び。ア、コリヤ、徳右衛門に急々對面したし、呼んでくりやれさ云ひ付けやり、旅砵の墨摺流し、以前の扇開いて、何か書付け用意の金子、薬の包、取認める目の先へ壘を貫く白及びの切先、氣轉の駒澤有合ぬく刀にそ、けば下には血汐と心待てしてやつたりと壘加上現れ出る笹久藏、駒澤覺悟と切

付る、又を恐れるきせるのあしらひ廊下傳ひに来かゝる亭主コハ何事と窺ふ内苦もなく刀打落し後なり切るなりとたんの拍子首は遙に飛散つたり。ヤレ連れお手の内ア、コリヤムハ、イヤ出来ましたイヤ申且那樣一休此奴は何者でござります、ホ、ウ、某を欺討にせんぞ飛で火に入る夏の虫ハ、死骸はよきに頼み入。ハ、お氣遣なされませすな。シテ只今召しましたは何の御用で御座りますオ、徳右衛門、折入つて頼み度きは先刻の朝顔と云ふ女、今一應呼び寄せて給るまいか。ハイ畏まりましたござります、彼女直ぐに清水と申す方へ参りました、御用事ならば呼びには遣はしませう。マ、イ、今夜のお間には、ム、ハテ残念至

極身は正七ツの出立、マ能々緑の。エ、何んぞ御意なされませす。アイヤナニ徳右衛門、今の女に謝禮の爲、此三品を其方に確り預け置か間、朝顔が参らば渡して呉りやれ。ハイ、コリヤマア、夥しいお金、其上結構な女扇、お薬までも。オ、サ、其薬は大明國秘法の目薬、甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、如何なる眼病も即座に平癒。朝顔に渡して呉りやれ。コレ、何から何まで、お心を籠められた下され物、参り次第相渡し、ハイエ、悦ばしますでござりますしよ。受取る折しも時計の七ツム、ア、リヤ最う七ツの刻限と、數ふる内に岩代多喜太、裝束改め旅出立、同勢引連れ立出て、イヤ

駒澤氏、出立仕らうと、勸むる言葉に治郎左衛門、衣紋繕ひ立出づれば、見送る亭主も暇乞ひ、心そぐはぬ駒澤岩代、打連れてこそ出で行く。跡見送つて徳右衛門。ハ、同じ侍でも黒白の違ひ、意地くれ悪い岩代に引替へ、情深い駒澤殿、ア、天晴れの侍じやなヤ。夫ばさうと、朝顔に、今夜の禮にはそぐはぬ下され物、ハア何ぞ様子の有りそな事と、思案の折から、深雪は何か氣に掛り、座敷しまふてうさくさ、又立返る切戸の内、徳右衛門目早に見て。オ、朝顔が、遅かつた。宵の御客様が最う一度呼びに遣つてくれいと仰しやつたれど、清水へ往つたと聞いた故、お断り申したれば、今の先お立ちなされた。併しマア悦

びや、大枚のお金も扇、又結構な目薬、我身に遣つて呉れいと、コレお預けなされたわいの。是はマア冥加に餘る事、ハお禮申さいで残り多いが、申し申し旦那様、此扇に何ぞ書いてはござりませぬか、はいかりなむらちつと見て下さりませ。オ、ドレ、エ、金地に一輪朝顔ア露の干ね間が書いてあるンヤ、裏に宮城阿曾次郎事駒澤治郎左衛門と書いてあるぞや、エ、アノ宮城阿曾次郎事、駒澤治郎左衛門と其扇にオイノ。エ、ハアはつさばかりに俄の仰天。知らなんだ、知らなんだ、知らなんだわいな、道理で能う似た聲と思ふたが、そんなら矢つ張阿曾次郎様で有つたかいの、申し申し旦那様、其お客様は何時お立ちな

されたへ。オ、今の先の事じやが、我身は又お馴染か。馴染所か、年月尋ぬる夫でござんするわいな、斯う云ふ内も心が急ぐ、追付いて只つた一言。と、行かんとするを引止め、ア、コレコレマア待ちや、エ、折悪う雨も降出し、此暗い一人は危い。くイエくイエ假令死んでも厭ひはせぬ。ササ、夫ばさうでも言の身で危い。イヤく放してくさ、突退け勿退け杖を力に降る雨も、合いつかな厭はぬ女の念力、跡を慕ふて。三重追ふて行く。名に高き、街追一の大井川篠を亂して降るあめに、打交り鳴るはた、神、漲り落つる水音は、物凄くも又すさまじき。夫を慕ふ念力に道の難所も見えぬ目も、厭はぬ深雪

び倒つ轉びつ、漸々爰に川の傍。
 ノウ川越達、駒澤治郎左衛門様と云
 ふ御侍、最う川をお越しなされたか
 未か、聞かしてくさ、云ふ聞さへ
 も息切れの、聲に川越口々に。オ
 其侍は今の先渡つたむ、俄の大
 水で川は止つた、笑し笑止まばかり
 にて、皆散々に行過ぐる。ナアナ
 ニ川も止つた。ハ、ア、悲しやと張
 詰めし、力も落ちて伏轉び、前後不
 覺に泣きけるむ、又起き上むつて見
 えぬ目に、空を睨んで。天道様、
 エ、聞ぬませぬくくわいの。此
 年月の艱難辛苦も、何卒最一度其人
 に、逢はしてたべと片時も、祈らぬ
 間さては無い者を、今日に限つて此
 大雨、川止まばく、エ、何事ぞい
 の、思へば此身は先の世で、如何な

る事の罪せしぞ、扱も扱も味氣無や
 焦れくた其人に、逢ふても知らぬ
 盲目の、此目は如何なる悪業ぞや。
 夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松浦
 深、中領振山の悲しきも、身に比べ
 ては數ならず、三千世界を尋れても
 こんな因果が又と世に、有るべきか
 はと口説き立て、拳を握り身を震は
 し、流涕焦れ歎きしは、餘所の見
 目も哀れなり。ヤ、有つて起直り。
 オ、さうじゃく、さても添はれ
 め身の因業、此川水の増さりしは、
 所詮死ねこの事なるべし、未だで添
 ふを樂に、爰を三途の川と定め、弘
 誓の船に法の道、急ぐん物と泣く泣
 くも、合夫を憐れ小石の敷、袖や袂
 に拾ひ込み、南無阿彌陀佛の聲諸共
 既に飛ばんす其所へ。ヤレお待ちな

され深雪様、ご聲にびつくりけしこ
 む内。駈け来る關助 徳右衛門、斯
 くご見るより抱き留め。マアく
 御待ちなされませ。イヤく誰かは
 知られど、放してく。マアく待
 つしやれ朝顔殿、コレ關助殿さやら
 が見えたぞや、ハ、ア下郎めてござ
 ります、まづん、氣をお静めなされ
 ませと、無理に手を取り抱退くれれば
 ム、さう云ふ聲は關助か、遅かつ
 たくくわいの、此年月艱難にて
 尋れ焦れた阿曾次郎様に、折角逢ふ
 たに盲の悲しさ、夫さも知らず別れ
 たれど、何うやらお聲が氣に掛り、
 戻つて開けばやつぱり其人、おのれ
 やれ追付かふと、跡追ふて来れば此
 川留、關助如何せうぞいのうく
 く。オ、お道理だくく、御尤

で御座居ます、何も拙者めも貴女様の御行衛を尋ね廻る内、一昨日の夜の夢に淺香殿に逢ひ、即ち貴女様は島田の宿、夜屋徳右衛門方にござるぞ、云はしやるぞ思へば目も覺め、シヤ何でも不思議ぞ、夜を日に繼いで參つた甲斐有つて、既ての事に危い所を、ヤレく嬉しやくくくハ、イヤモ下郎めもお目に掛る上は、お氣遣ひなされませぬ、駒澤様にお添はせ申す、併し淺香殿は、坂東順禮となつて、東海道へ尋ねて見える筈、もお逢ひなされましたか。な。サレバイノ其淺香に跡の月、濱松で廻り逢ふたが、其夜悪者に出逢ひ、數ヶ所の手疵、死ぬる今端に私を呼び、中山の邊には私が生みの親古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守り

刀を證據に尋ね行き、秋月弓之助が娘と名乗つて、逢へと云ふ教へ、可哀や終に死にやつたわいの。ムースリヤ淺香殿には最後ぞや。ホイ、はつとばかり驚く内、始終聞き居る徳右衛門。ム、そんなら御前は、秋月弓之助様の御息女様、又淺香と云ふは我娘であつたか、ムンと心に點き件の短刀拔手も見せず、腹へぐつと突立れば、コハ何事と驚く兩人。お、御不審は尤だが、先づ一通り聞てたべ、ハ、ア私事は其お尋ねなされる、古部三郎兵衛と申す者、即ち貴女様の祖父、秋月兵部様には三代柏恩、若氣の誤り、奥女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助様に助けられ、女諸共國を立退き産落せしは女の子、貧苦の中に育

つる中、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母の方へ此短刀を添へて養子に遣りしが、廻りくつて思はずも、親も命を助けられし、秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れず、この親を導きをつたか、オ、出かしたな、又昇前駒澤様の仰には、唐土傳來の目薬、甲子の年の男子の生血にて服する時は、如何なる眼病も、即座に平癒この事、則某の薬に誂合し、早く彼方へ、サ、早く、實にもさ關助用意の水香取出だし、手眞の血汐受留め。泣入る深雪が懐の、妙薬取出し差寄すれば、深雪受取り、我夫の情に餘る賜物と、押戴さく、只一口に呑み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、

ありく傍りの見え透くにぞ、深雪
が嬉しさ關助も、悦び合ふぞ道理な
る。ア、嬉しや、最早此世に望み
なし、何れも去らば去らばさ刀引廻
し、笛の緒を勿切つて、名のみ流る
大井川、水の泡さぞなりにける。
跡や骸に取り纏り、わつこばかりに
泣く涙、露の干ぬ間の朝顔も、合開
きし此目は盲龜の浮木優曇華の、花
に勝りし夫の賜物、二つには我故此
世に亡き人かこ、取りつき歎く後よ
り思いわけなく萩野祐仙、深雪やら
ぬさ取付を、首筋擱んでかつぎ上、
川へさんぶさ水けむり。早や明渡る
鶏の聲、山田の恵み彌勝り、茂れる
朝顔物語、末の世までも著るし。



中 攝州合邦辻

合邦内の段

合邦内の段

豊竹島太夫 鶴澤芳之助 鶴澤吉左衛門 豊竹綱右衛門 鶴澤狼太郎 豊竹古靱太夫 鶴澤清六

人形

親合邦 玉手御前 合邦房 俊徳丸 浅香姫 奴入平 吉田榮三 吉田小兵吉 吉田文五郎 桐竹紋十郎 吉田扇太郎 吉田玉松

この『攝州合邦辻』は安永二年二月北堀江座の正本として菅專助、若竹笛躬が合作したもので、元禄七年竹本義太夫正本『弱法師』の改作であります。上下二段より成り、上の段は住吉で玉手御前も、俊徳丸に毒酒を進める所、高安館の僞勅使、俊徳丸國遠、繪旨取戻しで下の段は天王寺西門閻魔王建立滑稽勸化、合邦内の段であります。書卸し當時合邦内の段の切は豊竹此太夫が語つてゐます。永らく上場を禁ぜられてゐましたので名作も世に出なかつたのですが、その禁も解かれて大正十四

年十月の御靈文樂座で古靱太夫が初演しました。只今では古靱太夫の合邦といへば晋く知られてゐるほど古靱太夫の得意の語りものであります。内容を申上げますと、合邦の娘お辻は氏無くして玉の輿、藤原通俊といふ公卿の奥方玉手御前と出世した。通俊には先妻腹の嫡子俊徳丸と外戚腹の次郎丸といふ二人の息がある。次郎丸は壺井平馬等と心を合せて俊徳丸をなきものにして家督を奪はんと計ります。玉手御前は義理ある子の俊徳丸に身も世もあられぬ無態の横戀慕をします朝香姫といふ美しい許嫁があるので嫉妬して俊徳丸に毒酒をすゝめて業病にかゝらせます。俊徳丸は家出して天王寺の非人小屋に籠つたが朝香姫が訪ねてゆき手を

携へて合邦の家へ行くも其處で計ら
 ずも玉手御前と落合ひます。合邦は
 娘の不倫の戀を怒つて我が及にか
 ますと玉手は始めて眞實の底意をう
 ち明けます。俊徳丸に戀慕と見せた
 は計略で悪者等の爲に一命も危い俊
 徳丸を助けやう爲であつたのです。
 卑しい女から玉の輿に乗せられた
 夫への報恩と繼子への義理立てであ
 ります。玉手御前は寅の年月捕つた
 女で、その臟腑の生血を絞つて飲ま
 せると俊徳丸の業病も愈ち治るとい
 ふ人口に噂突された狂言であります

(床本) 合邦内の段 (中)

願以此切徳鉦の音山が回向の申上百
 萬遍の同行中座並上下の差別なく心
 安居の岸はづれ合邦夫婦も志速夜

の料理そこ／＼に氣輕手輕の給仕こ
 そ心一ぱい馳走なり講中一番はしや
 き口せんべ屋の槌右衛門杉箸片手に
 しやにかまへチ、奇特によふ勤めさ
 つしやるの見れば新しい戒名も張て
 有ど炬燵のやぐらやあぶりこの様な
 角な字ばかりで一つも讀れど此様に
 味い事拵らへて講中を呼しやるから
 はごふで身内の佛でござらふ誰じや
 知らぬが頓生菩提と念佛に汁菜かみ
 まげて蓮池のはぜやの婆イヤコレ合
 邦殿志の佛が有と聞た故今夜の念
 佛は我一と精出したでいつもこは夜
 食も格別麥飯にさろ／＼る飛龍頭の
 平こんにやくの白あいではいかな亡
 者もする／＼と極樂へすべり込しや
 り／＼佛にならしやるま言も馳走の
 追従口主合邦取つくるひイヤモ今夜

の百萬遍はちつと遅れ亡者への手向
 國を隔てくらす故命日も知らずそれ
 で戒名も手作りで大入妙若大姉さ付
 て置た御存じもない佛に御苦勞をか
 けまする則ち是が逆縁の成佛心ばか
 りのほんの茶漬何もなくご御酒も三
 献よふまいつて下されご夫が挨拶女
 房は目には涙のふくみ聲久しう顔も
 見す死目にさへも得逢ぬむこい別せ
 めて未來を佛にご御苦勞かけての百
 萬遍よふこそ參つて下さりましたサ
 ア／＼なるもならぬもかく三でさ後
 の盃めん／＼にチツト有／＼こぼる
 くご夫婦むしいぶん大分にコリヤた
 べ過た満腹と膳は取れてもうつむい
 て辭宜さへならぬ腹撞梅いかい御雜
 作御馳走と禮もそこ／＼同行共皆打
 連れて立歸る後に女房は御明しの灯

はかき立れど晴やらぬ子故の闇のく
ごきご天にも地にも一人の子やつ
ぱり道心者の娘で置たら非業の最期
もさすまいものなま中河内一國の大
名の奥様と言はしたは親の科五年六
年逢見ぬ親子病ひでも有事か苦しい
死をする時に嘸や親々戀しいと思ふ
たである慕ひもせふ今ほの念に引き
れて未來も迷ふて居るで有可愛の者
やいぢらしやま身をひれ伏て泣かこ
つ合邦は尖り聲コレお婆エ、同じ事
をくり返し、未練のしつくはい不
仕合せ故十年以來天窓は刺つても心
は昔の侍、氣質一人の娘を高安殿へ
腰元奉公奥方に引上られても親有共
名乗らぬは斯いふ淺ましい姿故我子
の肩身もすぼろふと折ふしの狀通に
も必々親の一門もない者と言ひまく

れさくどいほど言ふてやつたも娘の
影で立身望と世上に言るゝか面倒さ
潔白な親さは違ひ子さ名の付た俊徳
様に無体な戀をしかけるのみか後迄
も慕ひ廻り大恩の夫を捨家出した徒
女郎其儘にして有ふか早速に追人を
かけ捨り殺しにかな成たて有无所存
をさげたやつ、子と思はれば不便に
もいぢらしうもなけれ共甲の百萬
遍は折々の眞の禮、又見す知らずで
も釵の難で死だ者は用ふてやるが天
窓の役そなたも武士の娘だてら見苦
しい泣顔さ叱れば婆は猶涙可愛そふ
に其様にむごたらしうは言ぬものか
たわな子に不便をかけるは世上の執
し、女は誰しもあるならひ徒者の不
義者のさ叱るのは生てゐる中死だ後
じやちつさばかり可愛やと言ふ逆佛

のさかめも有まいと恨歎けば爺親も
心の底は子を思ふ歎きを見せじさか
ぶり振りア、イヤ、我子でも悪人
を不便と思ふは天道へ敵對坊主の役
さ一旦は用ふたれご畜生めが其戒名
引破つて仕廻ひなりこそこの事は
そなた任せ抹香もきれたら盛なりと
御明しも消ぬやうに仕なりと勝手に
しやれ、おりや構はぬ、まんざらね
んころな他人の死だやうにも思はぬ
故思はず涙わハ、ハ、ハ、ア、いや、
涙は出れど年の科、此目がかすんで
くさすり赤めたる恩愛の涙隠せど
悲しさは聲のくもりに現はれし夫の
心波妻は手向の水の哀はげにせめて
未來の助にさくゆらす香のうす煙り
思ひは富士の高嶺さも袖は清見かせ
きさめて涙押へる鉦の音。

(床本) 合邦内の段 (切)

M しんくたる夜の道、戀の道には暗かられ共、氣は鳥羽玉の玉手御前、俊徳丸の御行方、尋れかれつゝ、人目をも、忍び兼ねたる頰冠り、包みかくせし親里も、今は心の頼みにて、馴れし古郷の門の口、立寄る後より入平む、御兩所の御行衛、爰こは聞けど奥方の、姿見るより様子も、戸脇にあつき藪疊、身を潜めてぞ窺ひ居る。かくこぼししらで玉手御前、ひわれに洩るゝ細き聲、かゝ様、かゝ様と、呼ぶは慥に娘の聲、ヤア、わりやまだ死なぬか、殺さりやせぬか、立上りし心付き、振り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞えぬは、ヤこれ幸ひと素知らぬ顔、

かゝ様、かゝ様爰明けて、叩く戸の音聞き詰め、コレ合邦殿、今こな様何ぞぞ云ふてか。イヤ何共云やせぬ、そりや空耳であるぞいの。イヤ、空耳かは知られ共、ちらり聞えた娘の聲、ハテ合點の行かぬと立上る。さう仰有るはかゝ様か、ちやつこ明けてくださんせ、辻でござんす戻りましたと、聞いて悔り、ヤア、戻つたとは夢ではないか、まめであつたか嬉しやと、かけ出る裾を取つて引さめ、ヤイくくく狼狽者、肌はふれてもふれいでも、我が子に不義をしかけた畜生、侍の身で高安殿が、助けおかしやる様なければ、何の今迄存命で、うかく爰へ何にしにこうぞい、ア、隠すより願はるゝはなし、親はないと云は

してもある事知つて、娘の手から度々の合力金、二人も命を養ふたは、皆高安殿の御厚恩。其夫の目をかすめ、畜生の心さげた娘、譬へ無事で戻つたさて、門はたも踏まされうか元來娘は斬られて死んだ。が今もの言ふたが娘なれや、夫こそ幽霊、そなた氣味も悪うはないか、肉縁の深い程、死人になれば恐いもの、必ず門の戸明けまいぞと、云ふに女房はイヤくくく、幽霊は愚か、狐狸の化けたのでも一度見たい娘も顔もしや恐ろしいものであつて、目を廻して死んだら仕合せ、いとし可愛い子を先立て、生きて業をさらそうより、一ト目見たいと振切るを、猶引さめて、ハテ扱て悪い合點じやわいの、狐狸か幽霊なればまだしも

もし誠の娘なら高安殿へ義理の言譯
いげんがなま差した役、親の手にかけ
殺さにやならぬ、それがいやさに留
めるのぢやと泣かれど親の慈悲心を
聞く子や妻は内と外、顔と顔とは隔
たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠
ぞ哀れる。娘は涙押し拭ひ、門の
戸口に口を寄せ、こゝ様の腹立、お
憎しみは御尤これには段々言譯あれ
ど、人目を忍ぶ此身の上、マア爰明
けて下さんせと、泣く／＼願へば母
親は、アレ聞いてか合邦殿、言譯が
あるさいのマア聞いてやつて下さん
せ、ハテ娘と思へば義理もかける、
幽霊を内へ入れるに、誰に遠慮もあ
るまいぞへア、いかさまのう、此世
をはなれた者なれば、世間を憚る事
もないそんなら早う呼込んでソレ茶

漬でも手向てやりや／＼、可愛や立
寄る所はなし、幽霊も嘸ぞひだるか
ろと、身を背けるは泣く百倍、母は
悦び門口の、戸しやおそしき開く間
も、おなつかしや。なつかしやと結
る娘の顔形、前後見つ肌に入
ても矢張りほんの娘、嬉しやまめで
ぬたかいの。然るは知らいで逆様事
あたいま／＼しい百萬遍、弔ひした
夜に無事な顔、ひよつと夢ではある
まいか、抱きしめ／＼嬉し泣き父
もほごぶる娘も顔、見たさに思はず
立寄れど、以前の詞と世の義理を、
思へばちやつと飛退いて、手持悪い
ぞいちらしき、母は漸う心を鎮め、
世間の噂にはの、そなたは、アノ
俊徳様とやらに戀をして、館を抜け
て出やつたの、イヤ不義ぢやのと思

ふ云へど、そなたに限り、よもや／＼
さう云ふ事はあるまいの、嘘である
／＼。嘘か／＼と箸持つてく／＼める
様な母の慈悲。
面はゆげなる玉手御前、母さんのお
詞なれどいかなる過去の因縁やら、
俊徳様の御事はれた間も忘れず戀こ
がれ思ひあまつて打付にいふても親
子の道を立て、つれない返事かたい
程猶いやまさる戀の淵いつそ沈まば
どこ迄もと後をしたふて歩はだし、
あしの浦々難波がた身をつくしたる
心根を不便と思ふて俱々に俊徳様の
行衛を尋ね女夫にして下さんすか親
のおじひと手を合せ拜みまれば母
親も今更あきれ我子の顔たゞ打守る
ばかりなり。父はさかふの詞なく納
戸の内より昔の腰引提出、ヤイ畜

生めおのれにはまだ咄されど、もこ
 おれも親は青砥左衛門藤綱といふて、
 ナ鎌倉の最明寺時頼公の見出しにあ
 ふて天下の政道を預り武士の鑑と言
 はれた人、おれが代になつても親の
 かげ大名の敷にも入たれど、今の相
 模入道殿の世に成て佞人共に讒言し
 られ浪人して廿餘年世を見限つての
 捨坊主此形になつてもナ親の譲りの
 簾直を立通した合邦が子に、よふも
 くおのれがやうな女の道も人の道
 もむちやくちやな娘を持たさ思へば
 無念で身節を碎けるわい、又高安殿
 が今日迄うぬを助けて置つしやる御
 心底を推量するに、もさおのれは先
 奥方の願元、後の奥方に引ふさそ有
 た時、達て辭退しおつたを心の正直
 懇望で無理やりに奥方になり、ア、

手をかけず奥様も言さずば此時宜
 にも及ぶまい、殺さじやならぬやう
 になつたも皆我業とお身の上を返り
 見て親への義理に助けて置しやるを
 エ有がたい恥かしいさ、思ふ心かけ
 しほごでも有なら醫へどれ程惚てお
 つても思ひ切に切れぬさいふ事はな
 いわい、それになんじや其さまにな
 つてもまだ俊徳様と女夫になりたい
 親の慈悲に尋てくれさばド、どのほ
 うげたでぬかした、エあつちから義
 理立て助け置つしやる程生けて置て
 はこつちも義理も立ぬ覺悟せいぶち
 放すも早抜きかくる刀の鯉口、母は
 取り付コレ合邦殿コリヤ了簡が違ふ
 たくおじひで助けて下さる娘、お
 志しを無足にして殺して義理が立
 ますかハテ此上は随分さ意見して俊

徳様の事思ひ切し命のかはりに尼法
 師いかなる科の囚人も助るは衣の徳
 浮世を捨れば死だも同然どこへの義
 理も立道理と奥へ指さし様々そ宥め
 すかして母親は我子の膝に膝すり寄
 せ聞やる通りの様子なればどの様に
 思やつてもそなたの戀は叶はぬ程に
 ふつつりと思ひ諦めて、早ふ早ふ尼
 になつても、つゝや二十の年ばい
 も器量發明勝れた娘、尼になれど勸
 めるはごんな心で有ぞいの、助たい
 ばつかりに花の盛りを捨てさせてか
 れ逆しも黒髪の百筋千筋を撫しもの
 刺ればならぬ此時儀は何の因果と計
 りにて縋り付て泣居たる娘は飛退き
 顔色がヘエ、譯もない事いはしやん
 すなわしや尼になる事いやじやく
 折角艶よふ梳込だ此髪がごふむごた

らしう刺れるもの、今迄の屋敷風はもう取置て是からば色町風随分はでに身を持って俊徳様に逢たらばあつちからも惚てもらふ氣、けがにも假にも尼の坊主の言ひ出して下さんすなご、けんもほろゝに寄付す、そふぬかしやモウ勸忍むご父も身構へ母親はチ、道理でござんす、腹の立ば尤ぢやがモウ半時かしいて一時わしに預て下さんせ、手の裏を返すやうに思ひ切して見せませう、夫婦に成て長の年月たつた一度のわしお願ひ聞届けて下されと、願へば是非も中の間へ見返りもせず行て、親母はいちばる娘の手引立くむりやりに納戸へこそは入月の影さへ見へぬ目なし鳥、番ひ放れず淺香姫、一間の内より俊徳の御手を引て忍び出

今の様子を聞に付モウ暫くも此内にお前はごふも置まされぬ、何國へなりとお供せうと、手を引立てば俊徳丸、我業満す母上に斯迄思はれ參らするも身の罪障さ言ながら館を出し頃には勝り兩眼しいたる其上にかゝるげやけき姿をばお目かけなば母上の愛着心は切もやせん、案内せよ今一度御目にかゝつて其上に入平夫婦も尋ね來ば召連て立退んと宣ふ聲を聞取門口ア、いや私めは先刻より始終の様子承ける、此所に御座有事里人の噂に聞ばもし敵方へもれば大事、一刻も早く御供せんご、氣をせく折しもかけ出る玉手、ナフなつかしや俊徳様お前に逢ふ計りにいくせの苦勞、物案じ、心をつくしたかひ有て、お健なお姿見たわいな

さすがり賜へば身をすりのけ、へエ情ない母上様館にても申すごこく同氏さへも娶ぬは君子の禁め、まして親子の中々に戀の色さか程まで慕ひ賜ふは御身斗りか宿業深き俊徳にまだ、罪を重れよさか、見るめいふせき此癩病兩眼しいて淺ましき姿はお目にかゝらぬかや是でもあいそがつきませぬか、コレ道も恥をも知賜へと涙ご俱に恨むれごホ、一オ、愚な事をおつしやります、其お姿も私が羨むさいごもうるさいごも何の思はふ思やせぬ自ら故に難病に苦しみ賜ふと思ふほごいや増戀の種となり、一倍いさしうござんすわいなア、フウ此業病を、母上の業ごおつしやる其仔細は、さればいな去年霜月住吉で神酒さ偽りコレ此鮑で勧め

た酒は秘法の毒酒、癩病發する奇藥の力、中に陪をしかけの銚子、私か呑だは常の酒、お前のお顔を見にくうして淺香姫にあいそつかさせ我身の戀を叶へふ爲、前世の惡業消滅さ家出有しはよい幸ひ、後を慕ふて知ぬ道、お行衛尋る其中も君が筐こ此孟肌身放さず抱しめていつか鮑の片思ひ、つれないわいなま御膝に身を投伏てくごき泣、様子を聞て俊徳丸無念と思せご義理の親、恨も言はれず兎に角に我身の不運ご御落涙、姫はいつそ涙も出す腹立紛れ取て突退けエ、聞ば聞く程餘りじやわいな

しやご恨み餘つてはしたなき玉手はすつくご立上りヤア戀路の闇に迷ふた我身、道も法も聞く耳持たぬ、モウ此上は俊徳様いづくへなりご連退て戀の一念通さで置ふか邪覽しやつたら蹴す殺さ、飛か、つて俊徳の御手を取て引立てア、ラ穢らはしご、ふり切るを放れじやらじご追廻し、さへる姫を踏のけ蹴退けいかる目は薄紅梅逆立つ髪は青柳の姿も亂る、嫉妬の亂行、門には入平身に冷汗、こらへかれてかけ出る合那娘か誓引摺みぐつご指込氷の切先、あつご玉ぎる聲に悔り戸をめりく、かけ込入平、驚く御夫婦、情なや母上を手にかけしかご御涙、娘をかへる母親は心からご言ひながらチ、術なかる苦しがるご歎けば今更人々も

涙くを添にける、合那は怒りの顔色、筋骨立て、ヤア皆何の爲に其の涙、ナ、何ほへるのぢや、女房共われ泣ては左衛門様や俊徳様御夫婦へ心の義理が立まいかな、此様な念の入大悪人をまだおのりや子じやご思ふか、おりやもふ、憎ふてくごふもかうもたまらぬばい十年以來蚤一疋殺さぬ手で現在の子を殺すも浮世の義理ご言ひながら、是坊主の有ふ事かい、コリヤヤイコリヤおのれ計りか此親まで佛の教を背かして無間地獄の釜、ごげによしをつたなア魔王めご抉る拳を手負は押へチ、道理でござんす道理じや、憎い筈じや、是には深い様子のある事物語るうち此刀、必ず抜て下さんすなご苦しき息をほつごつき様

も程がある、サア元のお顔にして返

仕やつたなふ、母御の身ごして子に戀慕、人間ごは思はれご道ならぬ事

ある事物語るうち此刀、必ず抜て下さんすなご苦しき息をほつごつき様

子さいふは外でもなく外戚腹の次郎丸様、年かさに生れながら後に生れた俊徳様に家督を繼すを無念に思ひ壺井平馬と心を合し、御世繼の俊徳様殺さふさいふかれての巧み推量ばかりか委しい様子立聞してなむ三寶義理ある中の御子と言ひ元は主人の若殿様、殺させては道立たず、此上は俊徳様御家督さへお繼なくば次郎丸様の悪心も自然と止でお命に別條ないと思案を極め心にもない不義徒いふもうるさや穢らばしい妹脊のかため毒酒をすゝめ、難病に苦しめたばお命助けふばかりの手便、戀でないこの言辭は身をも放さぬコレ此孟纒母の心子は知らぬ片思ひさいふ心の誓ひ、繼子繼母の義は立ても嗚や我夫通俊様根も賤しい女故、見

損ふた徒者とおさげしみを受るのが黄泉の障りになるはいのこ、いへさ合邦嘲笑ひ、ハ、ハ、ハ、ハ、夫程しれた次郎丸が悪事なぞ通俊様へ告げぬぞへ、たつた一口言ひさへすりや癩病にする事も不義者にもならぬわい口利根に言廻した逆今になつて、そんなくらしい言辭くふ様な親じやないわいイエ／＼そりやさ／＼様の御了簡違ひ、其様子を夫へ告なば道理正し左衛門様お怒りあつて次郎丸様切腹かお手討は知れた事、次郎丸様も俊徳様も私／＼爲には同じ繼子、義理ある中にかかりばない悪人なれど殺しては先立しやんした母／＼草葉の蔭でも嗚や歎、隔ち中故訴人して殺したかと思はれては世間も立ず、俊徳様もお子の事、何の心よからふ

ぞ、あな／＼こなたを思ひやり、繼子二人の命をば我身一つに引受て不義者と言はれ悪人になつて身を果すも繼子大切夫の御恩せめて報する百歩一と言譯聞て人々ば扱ばそうか疑ひの晴る程猶爺親はムウコリヤ娘其心でなげに又俊徳様の後追て家出したむ合點わいかぬはい、ヲ、尤なお咎なれど何國迄も行衛を尋あなたのお目にかゝらればいたばしやあの癩病御本腹はござんせぬぞ、聞て入平不審顔、フウ何さおつしやるお前様がお傍に付てござれば御本腹なさるゝさは、さればの事典薬法眼に様子を打明毒酒の調合たのむ折から本腹の治法委しく尋れしに、胎内より受たる癩病ならず毒にて發する病なれば寅の年、寅の月、寅の日寅の刻に

誕生したる女の肝の臓の生血を取り
 毒酒を盛たる器にて病人に與へる時
 は即座に本腹疑ひなしと聞た時の其
 嬉しき、それでく此盃身に添持
 て御行衛尋れさかす心の割符さく様
 何さ疑ひは晴ましてござんかへナイ
 ヤイくくそんなら何かそちが生
 れ月日も妙薬に合た故一旦は癩病に
 してお命助け、又身を捨て本腹さそ
 ふさ夫で毒酒を進ぜたな、アイへエ
 出かしおつた出かしたく娘、コ
 リヤやい娘モ、何にも言はぬ堪
 忍してくれく日本は扱置、唐にも
 天竺にも今一人さくらべる人もない
 貞女を畜生の悪人のさ憎て口いふ計
 りか親の手にかけむごい最期もコ、
 此おれがぐごんながらちや、あほう
 なからじや、救してくれさごぶ居

て悔み涙ぞ道理なる始終を聞て後徳
 丸探り寄て繼母の手を取押戴きく
 なさぬ中の義を重んじ御身を捨ての
 御慈愛、誠の親共命の親共言にもつ
 きぬ御厚恩身を百千に砕くとも何さ
 報じつづくすべき有難や忝けなやこ頭
 を疊に付け賜へば其お心さは露知ら
 ず勿体ない道知らずささげしんだの
 が恐ろしいお救しなされて下さりま
 せと兩手を合す姫の訛、適女の鑑
 にも言る、お身に悪名受かゝる御最
 期いたはしやと姫入平も悲歎の涙
 母は正体涙にくれほんにこの子が生
 れたは寅の年寅の月寅の日寅の刻、
 世間へ沙汰をせぬ物と世の教へば大
 事ぞさ夫婦親子の其外は犬猫にさへ
 隠したに義理にせまれば我さ我身を
 責はたる無常の虎ひよんな月日に生

れたは持て生れた不運かご歎けば道
 理さ一座の涙、あふ坂増井の名水に
 龍骨車かけし如くなり、手負は顔を
 ふり上げてサアくさ、様コレ此鳩
 尾を切りさいて肝の臓の生血を取此
 鮑で早ふくさ氣をいる娘、エ、憎
 いと思ふた張り合ひなりやこそ切も
 突もなつたもの今では眞底可愛い娘
 をごぶマアそれむ、むごたらしい、
 ヤ若役じや入平殿さやら大儀ながら
 たのみます、是は又迷惑千萬、主人
 の介抱お世話のお禮ごんな御用も相
 勤ふが御主人同然の玉手様ごへ及
 お當られませう、こればつかりは御
 免く、エ、未練な用捨もふ人頼みに
 は及ばぬと、懐劍逆手に取直せばマ
 い、待てくれ娘さても生ぬそちが
 命、臨終正念未來成佛々力頼む百萬

遍此人數でくる珠數の輪の中で往生
せいと取々廣げる珠數の輪の中に玉
手は氣丈の身構へ俊徳丸を膝元へ右
に懷劍左に盃、外には爺の親粒の
導師の役と鉦撞木母は涙の目も明か
す筈は死だと思ひ子も回向の爲の百
萬遍、今又無事なと悦んだも露も消
行く進めの念佛、南無阿彌陀佛く
くくくく内には難なく切さ
く鳩尾自身に血汐うけたる盃、指
付る手もわなくく俊徳丸は押戴
き母の賜、天地にも餘るばかりの御
芳志を只一口に吞干賜へば不思議や
忽ち兩眼開け面手足もまたくく
昔の姿に歸り、咲花の顔見る手負苦

しき片頬に笑ひ顔ヤア御本腹かこ一
座の悦び早斷末覽の四苦八苦、鉦も
早めて責念佛なまいだくくくく
願以此功德平等に死骸に取付き
縛り付、悲しみ涙添け涙、庭に波
打つばかりなり、歎きの中に母親は
頭の雪をうちばらひ、娘も菩提の尼
衣、俊徳君も涙をさめ廣大無邊繼
母の恩せめて少しは報ずる爲出世の
後ば此邊に一字の寺院を建立し母の
尼公を住侶させん繼母は貞女の鑑さ
も疊らぬ心は清る江に月を宿せし操
を直ぐに月江寺を號くべしと仰ば今
も尼寺を常念佛の鉦の音に昔の哀や
残るらん、父は常々勸進の自力他力

に此佛体建立して我住家を其儘一つ
の辻堂に營むも又平等利益東門中心
極樂へ娘を往生なし賜へも願ふ心は
後世の爲、現在の名殘數々は百八煩
惱夢さめて涅槃の岸に浮む瀬に
殘る盃の逆様事も善知識佛法最初の
天王寺西門通り一筋に玉手の水や合
邦む辻古跡をさめけり、



尼ヶ崎の段

豊鶴野鶴豊
澤竹澤竹島
狼網つばめ吉之
太衛門太夫

人形

母 皐月 吉田玉七
妻 操 吉田小兵吉
嫁 菊 吉田扇太郎
眞柴久吉 吉田玉市
武智重次郎 吉田玉幸
加藤正清 吉田文作
武智光秀 吉田玉松
軍兵 大い

次繪本太功記

尼ヶ崎の段

この床本は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒の合作で寛政十一年七月十二日初日の豊竹座で上演されたのが初演、初演の折は發端より十三冊目まで上演されたのが後世何冊目と引抜いて上演されるに到りました。書卸し當時紋下の麓太夫が十冊目尼ヶ崎を語つてゐます。本能寺の段は第二冊目で『眞書太閤記』を原に脚色したものです。筋は天正十年夏、京本能寺の旅舎で小田春永が三法師丸を饗應を催した夜、宿怨の武智光秀が反逆して夜討を仕掛たので蘭丸が力戦するといふ、有名な本能寺の夜

討を仕組だもので、これに蘭丸と侍女しのぶの戀を絡ませて色取とした段であります。尼ヶ崎の段は十冊目で俗に『太十』といはれてゐます。光秀は小田春永から勘氣をうけ領地を召上げられたので反逆心を起し春永を本能寺に夜襲して殺したので久吉は高松城を水攻めの最中であつたが主君の死を聞き和議を整はて光秀征伐に歸つて來た。光秀の母皐月は光秀の反逆を悲しみ廻國修業に出た光秀も悔いたが四方田に勧められ、伴十次郎と共に久吉と戦ふことになつた。この尼ヶ崎の段は廻國に出たさつきの閑居であります。旅僧に身を窶して一夜の宿を懇乞ひ家の様子を探りに來た木下藤吉を光秀は刺すつもりで母皐月を刺殺してしまふ

さいふのこの段の内容であります

尼ヶ崎の段

M 一間に入りけり。残る荅の花一つ、水上かれし風情にて、思案投首しほるばかり、やうく涙押さめ母様にもばい様にも、これ今生の暇乞ひ、此身の願ひ叶ふたれば、思ひ置く事更に無し、十八年が其間御恩は海山代難し、討死するは武士の習ひと思召し分られて、先立つ不幸は赦してたべ。二つには又初菊殿未祝言の盃をせぬが、互ひの身の仕合せ、わしが事は思切り、他家へ縁付して下され、討死に聞くなればさこそ歎かん不惑やと、孝と戀との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立ち涙轉び出で、わつさばかり泣き出

せば、はつと驚き口に手をあて。ア、コレノ聲が、高い初菊殿、扱は様子。アイ、残らず聞て居りました、夫の討死遊ばすを、妻がしらいで何させう二世も三世も女夫ぢやと思ふて居るに情ない、盃せぬが仕合せは、あんまり聞えぬ光義様、祝言さへもすまぬ内、討死さば曲がない、わしやなんぼうでも殺しはせぬ、思ひ留つて給はれと、すがり歎けば。ア、コレ此方も武士の娘ぢやないか十次郎が討死は豫ての覺悟ばい様に泣顔見せ、もし悟られたら、未來永々縁きるぞや。エ、サア、さかう云ふ内時刻も延る、其體懼爰へ爰へ、アイ、サ早う、時延びるほど不覺のもと、聞譯ないさ叱られて、いさしい夫も討死の、首途の

物の具つけるのが、どう急がる、物ぞいのご、泣くく取出す緋絨の、鎧の袖にふりかゝる、雨か涙の母親は、白木に土器白髪のは、長柄の銚子蝶花形首途を祝ふ鬘斗毘布、結ぶは親子手脚當、六具かたむる三々九度。合此世の縁や割子札、猪首に着なす鍬形の、あたりまげゆき出立は、さわやかなりし其骨柄。オ、天晴れ武者振りさまし、功名手柄見る様な、祝言も出陣を一緒の盃、サアサア早う、日出度い、嫁御察と、悦ぶ程猶いや増す名残りこんな殿御を持ちながら、これ別れの盃か悲しき隠す笑ひ顔、随分お手柄功名して、せめて今宵は凱陣をさ、後は得云はず喰ひしげる、胸は八千代の玉椿、散りてはかなき

心根を、察しやつたる十次郎、包む涙の忍の緒、しぼり兼たるばかりなり。哀を愛に吹送る、風が持てくる攻大鼓、氣をこり直しつゝ立上り。いづれも、さらばと言ひ捨て、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らず成にけり。ノウ悲しやこ泣入る初菊、母も操も顔見合せ。ばゞ様、嫁女、可愛やあつたら武士を、むざなく殺しにやりました、なう初菊、十次郎も討死の出陣さば知りながら、なま中留めて主殺しの、憂死恥をさらさうより健氣な、討死させん爲祝言によそいへ、盃さしたの、暇乞やら二つには、心残りのない様さ、思ひ餘つた三々九度、婆が心のせつなさを推量しやこばかりにて、初めて明かす老母の節義、きく初菊も母親も、

一度にぞつこ伏轉び、前後不覺に泣叫ぶ、襖押し明け何に氣無う、つかく出づる以前の旅僧、コレくかみ様、風呂の湯が沸きました、ごなたぞお這入りなされませこ、云ふにこなたは、泣顔かくし。オ、それは御苦勞去りながら、年寄に新湯は毒、後は若い女共、マアお先へ御出家から、いかさま、湯の辭義は水こやら、左様ならば御遠慮なく、お先へ参る、こ立上れば、三人は涙押包み奥の佛間と湯殿口、入るや月もる片びさし、愛に刈取る眞柴垣、夕顔柵のこなたより、現はれ出たる武智光秀、必定久吉此内に、忍び居るこそ屈竟、只一討と氣は張弓、心は矢竹敷垣の、見越の竹をひつそぎ鎗、小田の蛙の啼音をば、さめて敵に悟

られじこ、差足拔足、窺ひより、聞ゆる物音心得たりこ、突込む手練の槍先に、わつこ魂ぎる女の泣聲、合點ゆかすこ引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒ヤアこは母人か、しなしたり、残念至極さばかりにて、流石の武智も仰天し、只茫然たるばかりなり。聲聞付けてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、ノウ母様か情けない、此有様は何事さ絶り歎け目をみひらき歎くまい、歎くまい、内大臣春永こ云ふ主君を害せし武智が、一類、かくなりばつるは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不幸者こそ悪人こそ、たさへがたなき人非人、不義の富貴は浮べる雪、主君を討つて功名顔、たさへ將軍になつ

たさて、野末の小屋の非人にも、お
まりしとはしらざるか、主に背かず
親に仕へ、仁美忠孝の道さへ立たば
もつそう飯の切米も、百萬石に増る
ぞや、おのれが心只一つで、しろし
は目前これを見よ、武士の命を断つ
及も多にこのやうな、ひつそぎ竹
の猪、突槍、主を殺した天罰の、報
ひは親にも此通りさ、槍の穂先に手
をかけて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負
妻は涙にむせ返り、これ見給へ光秀
殿、軍の首途にくれなくも、お練め
申した其時に、思ひ留つて給はらば
かうした歎きはあるまいに、知らぬ
事さば云ひなむら、現在母御を手
かけて、殺すぞ云ふはエ、何事
ぞいの、せめて母御の御最後に善心
に立かへるさ、たつた一言聞かして

たべ、拜むわいのご手を合はし、諫
めつ泣い一つ筋に、夫を思ふ恨み泣
き、操の鏡曇りなき涙に誠あらはせ
り。光秀聲あららげ。ヤア猪小才
な諫言立、無益の舌の根動すな、意
恨を重ぬる小田春永、勿論三代相恩
の主君でなく、我諫を用ゐずして、
神社佛閣を破却し、惡逆日々増長
すれば、武門の習ひ天下の爲、討取
たるは我器量、武王は殷の紂王を討
ち、北條義時は君を流し奉る、和
漢俱に無道の者を虐ぐるは、民をや
すむる英傑の志、女童の知る事
ならず、すさり居らうと光秀む、一
心變せる勇氣の顔色、取つく島もな
かりけり。折しも聞ゆる陣大鼓、耳
をつらぬく金鼓の響き、あはやも見
るや表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津

瀬、刀を杖によるばひく、立歸つ
たる武智が一子、庭さきに大息つき
親人これにおはするや、云ふも苦
しき斷末魔、見るに驚く母親より、
娘は傍に走り寄り、のういたわしや
十次郎様、祖母様ぞ云ひお前迄此有
様は情けない、お心たしかに持つて
たべ、やいのくご取付て、介抱如
才泣くばかり。光秀わざと聲あら、
げ。ヤア不覺なり十次郎、仔細は
何さ、様子はいかに、具に語れと呼
はれば、はつこ心を取直し。親人
の差圖にまかせ、手勢すぐつて三千
餘騎、濱手のかたに陣所をかため、
今や歸國と相待つ所に、敵はそれぞ
も白浪の、櫓を押切つて陸地に漕付
け、おいく都へ馳せ登る、眞柴が
軍勢ござんなれと、関をつくつて味

方の軍兵、縦横無盡に薙立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、狼狽騒ぐを追詰め愛をせんご、戦ふ中後の方より大首上、眞柴築前守久吉の家臣加藤正清これにあり、逆賊武智が小童共、目に物見せてくれんすさ、いふより早く太刀抜かざし、四角八面に切立てられ、またく間に味方の軍卒、残らず討死仕り、無念乍も只一騎立歸つて候と、息つぎあへず物語れば、光秀怒りの髪逆立て、ヤア云ひ甲斐なき味方の奴原、シテ四方天田島頭は、さん候、四方天は目ざすは久吉一人と、昨朝よりの一騎むけ、亂軍なれば生死の程も、慥

にそれと承らず、親人の御身の上、心にかゝり候故、未諫にも敵を切りぬけ、これ迄落延び歸りしぞや、此所に御座あつては危ふしく、一時も早く本國へ引取り給へ、サ早く、こ深手を屈せず父親を、氣つかう孫の孝行心、聞くに老母はせき兼て、アレあれを聞きや嫁女、其身の手疵は苦にもせず、極悪人の悴めを、大事に思ふ孫が孝心、やい光秀子ば不惑にはないか、可愛いとば思はぬかやい、おのれも心只一つで、いとし可愛の初孫を、忠と義心に健氣なる、討死でもさす事か、逆賊無道の名を汚し、殺すはなんの因果ぞ

と。せぐり苦しき老の身の、聲聞きつけて十次郎。ヤアそんなら祖母様には、御生害遊ばしたむ、今生のお暇乞今一度お顔が見たけれど、モウ目が見えぬ、父上母様、初菊殿、名残り惜やと手を取つて、妹脊の別れ愛着の、道に引かゝるいぢらしさ母は涙に正體なく、討死するも武士の習ひさいへご情けない。詞十八年の春秋を、又の中に人となり、いつゆだね、今日首途の其時にも、母様今日の初陣に、天晴れ功名手柄して、父上やば、様に、響らるゝのが、楽しみと、につさ笑ふた其顔む、わ

しや幻にちらついで、得忘れぬこ
くどき立て、くどき立つれば初菊も
ほんに思へば此身ほど、はかない者
が世にあらうか、解けて逢ふ夜のき
ぬくも、永き名残の許嫁、二世を
結ぶの枕さへ、かはす間もなう此様
な、悲しい別れをする事は、マどう
した罪か情けない、私も一所に殺し
てたべ、死にたいわいの身をもだ
へ、互ひに手に手を取かばし名残涙
のいさま乞ひ、見るに目もくれ情消
え、母も老母も聲をあげ、わつこげか
りに取亂せば、流石勇氣の光秀も、親
の慈悲心子故の闇、輪廻の絆にしめ
つけられ、こたへかれてはらくは

ら雨が涙の汐境浪立ちさわぐ如くな
り。又も聞ゆる人馬の物音、矢叫び
の聲かまびすくM手にこる如く聞
ゆれば、光秀聞よりつゝ立ち上り。
アノ物音は敵か味方が、勝利いか
に庭さきの、拗木の松ケ枝踏しめ
くよち登り、眼下の村手をきつこ
見くだし。和田の岬の弓手より、
追々つゞく數多の兵船、間近く立つ
たる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印は、
疑ひもなき眞柴久吉、風を喰つて此
家を逃げのび、手勢引具し光秀を、
討取るでだてこ覺えたり。こ云ふよ
り早くひらりと飛下り、草履摺みの
猿面冠者、イデートひしき身繕ひ

勢ひ込んでかけ出せば。ヤア武智
光秀暫く待て、眞柴筑前守久吉、對
面せんと呼はつて、三衣にかはる陣
羽織、小手脚當も優美の骨柄、悠然
さして立出れば、光秀見るより仰天
し、駭戻つてはつたと睨み。ヤ、
珍らし、眞柴久吉、武智十兵衛光秀
が此世の引導渡してくれん、觀念せ
よと詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の
子故に手疵屈せぬ老女、ノウ久吉様
我も子に代るこの母も、天命のわれ
ぬ引そぎ槍、つくりし罪の萬分一、
亡る事もあらうかよ、思ひ餘つた此
最後、武智も母は逆磔付に、懸つて
無慘の死を遂げしよ、末世の記録に

残してたべ、それも矢張悴めむ、可愛さ故の罪亡し。うるさの娑婆に

賈の雌雄を決すべし、おいかにく

てしもうげ玉の、其黒髪をあへなく

残らんより、孫と一緒に出三途、

一トまづ都に立歸り、京洛中の者共

も、切拂ふたる尼ヶ崎、菩提の種も

もさらば、おさらばと、未練残さ

へ地子を許すも母への追善、互ひの

のいな、き迎ひの軍卒、見渡す沖は

ぬ武士の花も實もある此世の別れ、

運は天王山、洞か峠に陣所を構へ、

威風凜々凜然たる、眞柴が武名假名

今ぞはかなくなりけり。操の前も

念せよ、ホーホー、何さ、

書に、寫す繪本の太功記と、末の世

初菊も更に詞も出でばこそ、あへ亡

たごへ項羽が勇ありとも、我又孫吳

までも三重残しける。

骸を押動かし、天に憧かれ地に伏し

が秘術をふるひ、千變萬化にかけな

やまし、勝鬨上るは瞬く中ご久吉が

て、歎く心ぞいぢらしき。哀を餘

詞はゆるがぬ大磐石、忽ち廻り小栗

栖の、土に哀を残すまば、知らず知

所に眞柴久吉、光秀に打ち向ひ。俱

に天を戴かぬ亡君の甲ひ戦、今此所

で討取つては、義あつて勇を失ふ道

理、諸國の武士に久吉が軍功を知ら

さん爲、時日を移さず山崎にて、勝

二世をかための別れの涙、かかれと



切本朝廿四孝

十種香の段
狐火の段

十種香の段より
狐火まで

竹本小春太夫
竹澤團六
竹澤團二郎
鶴澤友駒

人形

武田勝頼 吉田扇太郎
腰元濡衣 桐竹政龜
娘八重垣姫 桐竹紋十郎
長尾謙信 桐竹門造
白須賀六郎 吉田市松
原小文次 吉田文作

この淨瑠璃は武田上杉兩家の確執に齋藤道三の謀叛を取合せたる作にて『信州川中島合戦』三軍桔梗ヶ原』等を藍本として更に趣向を立て技巧を凝らしたるものにて近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作で初演は明和三年正月興行の竹本座で、十種香の段より狐火迄は四段目の切でこの段に織込まれたるところを申します、上杉武田兩家和睦の爲めて義晴の後室手羽女御前が勝頼と八重垣姫とを許嫁させます。大切には道三が滅亡し、勝頼八重垣姫は芽出

度夫婦になるのですが十種香の場の勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは花造りの装作であつたのです。仍ち其處に取替子の面白さが湧いて來るのです。濡衣は装作を通じてゐました、濡衣は齋藤道三の娘であります道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び勝頼も亦花作りとなつて上杉へ忍び入つてゐたものです。狐火の氷渡りの事は支那西湖の故事であるのを諏訪湖へ持て來たものであります。

十種香の段より狐火まで

行水の流るゝ人の装作が、姿見かばす長上下、悠々として一間を立出で、我民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作りとなつて入込みしは、幼君の御身の上に、若過ちや

あらんかき、餘所ながら守護する某
 それと悟つてかへしや、ハテ合點
 の行かぬささしうつむき、思案にふ
 さむる一ト間には、館の娘八重垣姫
 許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日よ
 り。一ト間所に引籠り、床に繪姿か
 けまくも、御經讀誦の鈴の音、こな
 とも同じ松虫の、鳴く音に袖も濡衣
 む、今日命日の弔ひの、位碑に向ひ
 手を合せ、廣い世界に誰あつて、
 お前の忌H命日を、弔ふ人も情なや
 父御の悪事も露知らず、お果なされ
 たお心を、思ひ出す程おいさしい、
 嗚や未來は迷ふてござらう、女房の
 濡衣む、心ばかりの此手向、千部萬
 部のお経ぞと、思うて成佛して下さ
 んせ、南無阿彌陀佛くく。誠に
 今日霜月廿日、我身替りに相果し

勝頼が命日、暮行く月日も一年餘り
 南無、幽靈出離生死頓生菩提、申
 し勝頼様、親と親との許嫁、在りし
 様子を聞くよりも、嫁入する日を待
 兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見
 れば見る程美しい、こんな殿御と添
 臥しの、身は姫御前の果報ぞと、月
 にも花にも樂しみは、繪像の傍で十
 種香の、煙も香花となりたるか、回
 向せうとてお姿を、繪にばか、しは
 せぬものを、たましびかへす反魂香
 名畫の力もあるならば、可愛さたつ
 と一ト言の、お聲も聞きたい聞きた
 いと、繪像の傍に身を打ふし、流涕
 ごかれ見え給ふ、あの泣き聲は八
 重垣姫よな、我名を呼びし勝頼を、
 誠の夫と思ひ込み、弔ふ姫と弔ふ濡
 衣、不慙さもいちらしとも、云はん

方なき二人が心こ、そいゝ涙にくれ
 けるが、ア、我ながら不覺の涙と、
 襟かき合せ立上る、後にしよんぼり
 濡衣む、申し装作様、合點のゆか
 ぬばあなたのお姿、ごうした事で此
 やうに、オ、不審尤、はからずも
 誼信に、かへられたる衣服大小。
 テモ扱も、衣紋付きなら上下の召様
 まで、似たさはおろか矢張其ま、
 かたみこそ今は仇なれこれなくば、
 忘るゝ事もありなんこ、讀みしは別
 れを悲しむ歌、かたみさへぢやに我
 夫に、みちん變らぬ此お姿、見るに
 つけても忘れぬ、私や輪廻に、
 迷ふたそうな、御ゆるされてご伏洗
 む、泣聲もれて一間には、不審立聞
 く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、
 姿見紛ふ方もなく、ヤア我妻か勝頼

様と思はず一ト間を走り出で、縋り付いて泣給へば、はつご思へごさらぬ風情、こは思ひ寄ざる御仰せ我等藝作と申す花作、漸々只今召しかへられ、衣服大小改めし新参者勝頼とは覺えなし、御廬相あるなご突放せば、ム、何と云やる、今父上にかへられし新参者、花作の藝作とや、自こした事ご、餘りよう似た面ざしの、もしやそれがご心の煩惱、二人の手前恥しながらコレ濡衣、此藝作とやら云ふ人を、そなたは疾うから近付きか。エイ。いやいの、知る人であらうがの。アノお姫様とした事ご、たつた今見えたお人、なんのまあ私ご。イヤ隠しやんな今の素振、忍ぶ戀路さいふやうな、可愛らしい仲かいのこ、思ひもよらぬ詞に悔り、オ、お姫様の仰有る事わいの、人にこそよれ、なんのあなたに勿体ないご云やるからは、どうでもそなたのしる

べの人がイーエ。さうではなけれ共、大事のお主の目をかすめ、忍び男を拵へるは勿体ないご申す事で御在ります。ム、すりやしるべの人でなく、殿御でもない人なら、どうぞ今から自を、可愛がつてたもる様押付なから媒を、頼むは濡衣さまくご夕日まばゆく顔に袖、あてやかなりし其風情、オ、お姫様とした事ごまだお子達と思ひの外、大それたあの藝作殿を。サア見染めたが戀路の始め、後ごも云はず今爰で、媒せいご仰有るのか。我折れ、ほんに大名のお娘御とて、油断はならぬ戀のみち、品によつたらお取持ちいたしませうか。コレ濡衣、必らず廬相云ふまいぞ。サア何もかも私が吞込んで、ナ、吞込んでお取持すまい物でもないが、眞實底から藝作殿に御執心でござりますか、ご問はれて猶もあからむ顔、勤する身はいざしらず、姫御

劇場・頭店
場内・室輪
装飾・内造
花用・巾花



花六

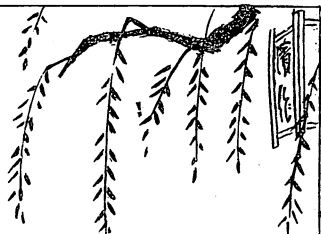
電話南二八七三番
大阪南區千代田町二十九番
工場東區片江腹見町

前のあられもない、殿御に惚れたと云ふ事
 が、嘘、偽に云はれうか、其お詞に違ひ
 なくば、何ぞ値な誓紙の證據、それ見た上
 でお媒、オ、それこそ心易い事、其の誓
 紙さへ書いたらば。イエ、夫もこつちに
 望みある、私が望む誓紙と云ふは諏訪法性
 の御兜、それが盗んで貰ひたい。ヤア何と
 云やる、諏訪法性の御兜を、盗み出せと云
 やるのは、扱てはあなたも勝頼様と云ふ口
 押へて、ハテ滅相な勝頼呼びばり、みぢん
 覺のない装作、龐忽ばしのたまふなと、云
 ふ顔つれ、打守り。許嫁計りにて、妹交さ
 ぬ妹脊中、おつ、みあるは無理ならねど、
 同じ羽色の鳥つばさ、人目にそれと分られ
 ぞ、親さ呼び又つま鳥さ呼ぶは生あるなら
 ひぞや、いかにお顔が似ればとて、戀しと
 思ふ勝頼様、そも見紛うてあられうか、世
 にも人にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、

連添ふ私に何遠慮つかうと御身の上
 明して得心さしてたべ、それも叶はぬ事な
 らば、いつそ殺してと、縋り付いたる
 恨み泣き、父謙信の聲さして、装作は何れ
 に居る、搦尻への返答、時刻移るも立出れ
 ば、はつと装作飛しさり御支度よくば直様
 參上、ホ、委細の事は此の文箱に、片事も
 早く罷越せばつと、領掌文箱携へ、搦尻さ
 して急ぎ行く、謙信後を見送つて、ヤアく
 者共、用意よくば早來れと、仰せにはつと
 白須賀六郎、原小文治、更科なんどの譜代
 の郎黨、御前にすゝめば謙信勇んで今此諏
 訪の湖に、氷閉れば渡海は叶はず、搦尻
 迄は陸路の切所油断して不覺を取るな、ハ
 ア畏り奉るぞ、勇み進んでかけりゆく。
 後に不審は八重垣姫、申し父上、こゝろく
 しい今の有様、何事やらん尋れば、ホ、
 あれこそは、武田勝頼討手の人数、何に勝

即席御料理
 電話新町壹九番

新町
 濱作



頼様を討手さば、コハそもいかに何故お驚
 く二人をばつたご睨め付諏訪法性の兜を
 盗み出さんうぬらが巧み、物かけにて聞い
 たる故、勝頼に使者を云付け、歸りを待つ
 て討取さんご、勝負はせる討手の手配エイ
 そんなら今の討手の者は、勝頼様を殺さん
 爲か、ハアはつごばかりにござ伏し今日
 は如何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我夫
 に再び逢ふは優曇華ご、悦んで居たものを
 又も別れになる事は何の、因果ぞ情けなや
 父のお慈悲にお命を、ごうぞ助けて給はれ
 ご、口説き歎くに目もやらず、ヤア武田方
 の廻し者、憎き女ご濡衣引たてうぬには尋
 れる仔細あり、奥へ失せうご小腕ごさり、情
 用捨もあら氣の大將、帳臺深く入り給ふ。
 思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜
 ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火
 さよふけて、アレアノ奥の間で檢校が、諷

ふ唱歌も今身の上、おいごしいは勝頼様、
 かゝる巧みのあるごごも、知らずばかりぬ
 御身の上、別れごなるもつれない父上、諫
 めても、歎いても、聞入れもなき胸慾人、
 娘不惑ご思はずなら、お命助けて添はせて
 たべご、身を打伏して歎きしが、イヤ〜
 泣いてあられぬ所、追手の者より先へ廻り
 勝頼様に此事を、お知らせ申すが近道の、
 諏訪の湖船人に渡り頼まん急むんご、小
 襖取手も甲斐〜しく、かけ出せしが、イ
 ヤ〜、今湖に氷張詰め、船の往來
 も叶はぬよし、歩路をいては女の足、なん
 ご追手に追つかれう、知らすにも知らされ
 ず、みす〜夫を見殺しにするは、いかな
 る身の因果、ア、翅ごほしい、羽ごほしい
 さんで行きたい知らせたい、逢ひたい見た
 いご夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思ひ、千
 年百年泣きあかし、涙に命絶ゆればきて、

茶



橋池御改大
 茶
 番ニ三六二町新話電

夫の爲にはよもなるまじ、此上頼むは神佛
 と、床に祭りし法性の兜の前に手をつかへ
 此御兜は諏訪大明神より武田家へ、授け給
 ばる御寶なれば、取も直さず諏訪の御神、
 勝頼様の今の御難儀、助け給へすくひ給へ
 せ、兜を取て押頂き、押頂きし佛の、も
 しやは人の咎んぞ窺ひ下りる飛石傳ひ、庭
 の溜の泉水に、うつる月影怪しき姿、はつ
 ぞ驚き飛退しが、今のは慥に狐の姿、此泉
 水に寫りしは、ハテめんようなきごきつく
 胸を撫でおろし、こはくながらそる
 く、さしのぞく池水に寫るは己の影ば
 かり、たつた今此水に、寫つた影は狐の姿
 今又見れば我も佛、幻ぞ云ふ物か、但
 し迷ひの空目ぞやらかハテ、怪しやまつお
 いつ、兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白
 狐の形、水にあり、有明月、不思議に胸
 もにこり江の池の汀にすつくりと、詠め入

つて立ちたりしが、誠や當國諏訪明神は、
 狐をもつてつかはしめと聞つるが、明神の
 神体に等しき兜なれば、八百八狐つき添ひ
 て、守護する奇瑞に疑なし、オ、それよ
 思ひ出したたり、湖に氷張詰むれば、渡り初
 する神の狐、其足跡を知邊にて、心安う行
 きこう人場、狐渡らぬ其先に渡れば、水に
 溺るこは、人も知つたる諏訪の湖たさへ
 狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に神の力の
 加はる兜、勝頼様に返へせとある、諏訪明
 神の御教へ、ハア、忝や難有やと、兜を
 取つて頭にかつげば、忽ち姿狐火のこゝに
 も燃へ立ち、かしこにも亂る、姿は法性の
 兜を守護する不思議の有様、諏訪の湖か
 ち渡り甲斐と越後の兩將と其名も今に残る
 らん。

大阪島之内
 廣田八千堂
 電番三五五番
 美 簾
 うちわ
 扇子
 各種印刷
 紙製品
 摺物

四月橋畔
よ
六月の文樂座
消息日誌

△五月三十一日

(六月本格興行) 東西松竹合併統一紀念興行の初日開場。

△六月一日

JOBKの吉例行事になつてゐる舞臺中繼放送を催し午後八時より一時間餘に渉り「御所櫻堀川夜討」辨慶上使の段を左の通り全國へ放送しました。

中 相生大夫(糸)清二郎
切 古靱大夫(糸)清六

△六月一日

世界各國の風土人情を研究して色彩に要點を置くゼネラル・モーターズ會社の美術色彩部長のクーパー氏も漫遊の途次來

阪を機に當座へ立寄られました。人形に就ては非常に賞讃され場内裝飾の點にも非常にいい感じを享けたまは満悦でありました。

色の配合と調和が非常によく整つてゐます人形使ひの優れた技巧は感服のほかなく明らかに蕩酔さされたさ語つてゐました。

△六月一日

富久娘醸造元の花木本店の抽籤會場となり多數の方々も商用を兼ねた御覽觀をなさいました。

△六月四日

大阪・京都他四縣の方面委員の幹部連の御來觀あり一段の盛賑さを呈しました。

△六月五日

院展の機威前田青郎畫伯も週刊朝日編輯長の大道氏と伴に文樂木版繪葉書の作者

贈答おみけ

お葉子
お菓子
お布
お昆布
お粟
お井戸
お東京(菊池家)
お名菓
お富貴
お寄

聲曲家愛用

美音あめ

美しき入罐

¥ 1.00×0.50×0.30

文樂座前
電南六六九〇
文樂堂

齊藤清二郎氏の紹介で當座を訪問、古軼師の辨慶上使を見聞し樂屋に於て榮三師に就て種々人形の説明を聴き素描數點を携へて歸られました。

△六月六日

目下來朝首樂行脚の弓を休めてゐるハンガリーが世界に誇る現代提琴界の第一人者ヨセフ・シゲテイ氏が大阪公演の第二夜の時間を利して當座を來訪加賀見山のガロテスクな奥庭殺しの場を見聞して七時過ぎ歸館されました。

△六月八日

鹿兒島加治木高等女學校の生徒六十餘名が教諭に伴はれ土佐師の紹介で御來座されました。一同始めて人形淨瑠璃に接したこゝろ非常に興味を誘致し禮讚あつて定時の九時に梅田驛へご迎はれました。

△六月十三日

明治生命大阪支店主催の大觀劇會もありました、同支店では毎月吉例として開催してゐられますが毎回非常に盛會を極めてゐます。

△六月十六日

吉例文樂會開催

△六月十七日

大阪府工藝協會の主催に依る「優良國産品愛用宣傳關西九州工藝家大會」の慰安觀劇會も好者連によつて組織され、府の片岡工務課長、市の入江産業部主事の幹旋で非常に盛會に催されました。

△六月十八日

文部府督學官長俊一氏が府督學課長の島田牛雅氏の案内で來座され古軼の辨慶上使にいと興深く賞讃の辭を残して歸館されました。

は用御の話電お

南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番



づまは 會宴御

いのじ感・いる明

〜 理料泉温一南

のまさなみ
理料泉温一南

橋 ツ 四

△六月十九日

全國大都市小學校長幹事會の方々が元教
護聯盟幹事で女學生マチネーに盡瘁され
た船田阪東高等小學校長の肝入で御觀賞
遊ばされました。

△六月十九日

清堀婦人會の方々が皆様お連れ合はされ
趣味の一日を文樂座に送られわが郷土藝
術の至藝に蕩酔されました。

△六月二十一日

午前十時開演約三時間に涉り全市有志の
家政實科女學校の女生に文樂マチネーを
御鑑賞希ひました。狂言は教育資料満點
教護聯盟推薦の『加賀見山舊錦畫』草履
打より奥庭仇討迄でありました。
出演者は文樂出勤中の精銳若手連で熱こ
ろに終始した舞臺に全女生を泣かせまし
た。當日參加の學校は左記の通りであり

ましたが特にこれ等の校長並に先生方が
わが大阪を愛する郷土愛さ、よりよき教
養への誘導に努められ世界に誇る日本唯
一の藝術に理解を持たれ女生に觀覽せし
められたる御厚意を謹んで感謝致します
參加學校

久寶・中大江・育英・九條第二・泉尾
第一・靱・高臺・堀江の各實科並に家
政女學校。

△六月二十一日

東西松竹合併統一記念の六月興行も大方
皆様の御厚大なる御支持と御後援によつ
て盛況裡に打上げました。

七月の文樂消息

△七月一日より六日まで

京都南座に進出、狂言二日目替りにて三
回目まで續演連日満員の好成績を挙げま
した。

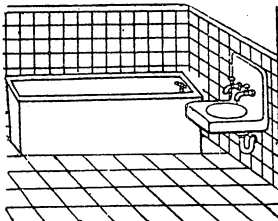
化粧多イル

水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水淨化装置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋

岡部商會

電話新町(六六九
二二七六)

阪急 夙川

岡部商會支店

電話西宮一九七六

主なる太夫は津、鏡、大隅、文字、相生

つげめ、鏡、南部等其他若手連の總出演。

糸は友次郎(急病のため十七年

振で鶴澤綱造も入座出演)

新左衛門、道八、廣助、芳之助、勝平、歌助等。

人形は榮三、文五郎、玉次郎、玉

松、小兵吉、政龜、紋十郎、扇太郎等。

上場曲目は

○ 齋式三番叟、辨慶上使、沼津、堀川、千本櫻道行。

○ 太十、十種香、逆櫓、帶屋、琴責

○ 本下、合邦、寺子屋、酒屋、妹春道行。

△七月十一日より廿六日まで十六日間
東京明治座に進出、狂言五回替りにて演

續連日満員稀有の好成绩でありました。
主なる太夫、三味線は

津(綱造)土佐(吉兵衛)鏡(新左衛門)大隅(道八)相生(芳之助)つげめ(廣助)鏡(吉左)南部(吉彌)等其他若手連。

人形は榮三、文五郎、玉次郎、玉七、政龜、玉松、小兵吉、紋十郎、玉幸、扇太郎、門造等其他若手連。

上場曲目は

○ 引窓、辨慶上使、酒屋、寺子屋、新口村、千本櫻道行。

○ 太十、帶屋、十種香、逆櫓、玉三千兩轍。

○ 本下、壺坂、陣屋、河庄、琴責、重の井、白石揚屋、吃又、先代御殿、合邦、妹春道行。

○ 假名手本忠臣藏の通し。

現代的



電話 戎三七五六番

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)	夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
文樂座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓

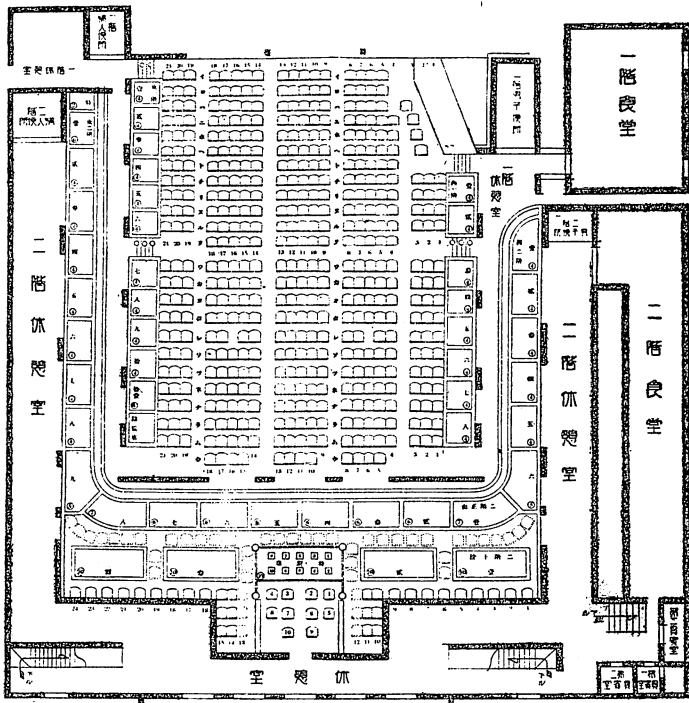
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具	備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝 夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺	3圓
サスペンションライト	100W 00W	1臺	2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本	1圓
セラチンペーパー		1枚1回	1圓
大 衝 立	晝 夜	1對	5圓
演 壇 設 備	同	1回	2圓
其 他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラゲエータ使用料			無料

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物も出来、またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席。壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由になれます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ぬます

切符賣場右指定席切符は當日發賣さる正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數様お團體様のお申込も御相談いたします。

内案御堂食座樂文

スピード・テイナー (御定食) 一、五〇
 フライ(海老、魚) 四、〇〇
 ガム・レツ 四、〇〇
 コロツケ 四、〇〇
 ビーフカツレツ 四、〇〇
 チキンカツレツ 四、〇〇
 ビーフステーキ(五分間) 三、五〇
 カレーライス 三、五〇
 チキンライス 三、五〇
 コールドチキン 三、五〇
 コールドハム 三、五〇
 コールドビーフ 三、五〇
 マカロニ・チース 三、五〇
 アスパラガス 三、五〇
 サンドウィッチ 三、五〇
 ソーダ水(特製) 二、〇〇
 文楽スヘツシアル 二、〇〇
 ビーフステーキ 二、〇〇

時 價
 一、五〇
 四、〇〇
 四、〇〇
 四、〇〇
 四、〇〇
 四、〇〇
 三、五〇
 三、五〇
 三、五〇
 三、五〇
 三、五〇
 三、五〇
 三、五〇
 二、〇〇
 二、〇〇



洋食堂
 (西館階上)

吸付辨當 二、〇〇
 御食事(五品御飯香物) 一、〇〇
 親子 五、〇〇
 ちぎり 五、〇〇
 雀の巣 五、〇〇
 鐵火 五、〇〇
 雀の巣 五、〇〇
 赤吸物 三、五〇
 お吸物 三、五〇
 菊正宗 二、五〇
 特アサヒビール 三、五〇
 ダイヤレモン 三、五〇
 ソーダ水(普通) 二、〇〇
 紅茶 二、〇〇
 アイスクリーム 二、〇〇

二、〇〇
 一、〇〇
 五、〇〇
 五、〇〇
 五、〇〇
 五、〇〇
 五、〇〇
 三、五〇
 三、五〇
 二、五〇
 三、五〇
 三、五〇
 二、〇〇
 二、〇〇

和食堂
 (西館階下)



酒場 (西館階上)
 文楽カクテル 一、六〇
 マンハツタンカクテル 一、六〇
 ドライマテニイ 一、〇〇
 アブサンフラツハ 一、〇〇
 ミリオンダラー 一、〇〇
 ミリオネア 一、〇〇
 ウイスキー 一、〇〇
 コニヤツク 一、〇〇
 リキユール 一、〇〇
 チービスケツト 一、〇〇
 ソーダ 一、〇〇

各各各各
 二種種種種
 七九〇六六七
 〇〇〇〇〇〇



洋酒
 お茶

南一温泉料理
 經營

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守り下サル事ハ勿論・器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセマ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ滅失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセシ
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
- 既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセマ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

◇ 文樂座御ひるき名簿募集 ◇

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

フランス語に譯された

『**文樂人形芝居の研究**』 一部特價

宮嶋綱男氏著 寫眞版數十個挿入 金一圓八十錢

人形習理端と文樂座發達の歴史が全部判る唯一の文獻

『**文樂今昔譚**』 一部特價 金二圓

木谷蓬吟氏著

美しいグラフと興味溢るゝ好讀物月刊雜誌の

『**道頓堀**』 一部 金三十錢

御休憩は

バルコニー
露臺遊歩場を御利用下さい。

食堂二階より御自由にお昇り下さいまし。

蒸し夕オールの設備が御座ぬます

一階西側の大休憩所に御座います
どなた様でも御自由におつかい下さい。高雅な香りの**資生堂ローション**を使用してゐます。

冷し麥茶を御自由にお召上り下さい

お土産に

お知合への通信用に

文樂木版手摺繪葉書

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある

齋藤清二郎氏の作品です

毎月發行 三枚一組美麗なる包裝

一部 金五十錢

額面用のものも 三部一組別包裝

毎月發行 一部 金壹圓

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい。

御携帶品

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帶願ひます。

お場席券

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由に御飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります一階西側に給茶處と大休憩所を新設しましたから御使用下さい。

御休憩の間は

四ツ橋文樂座

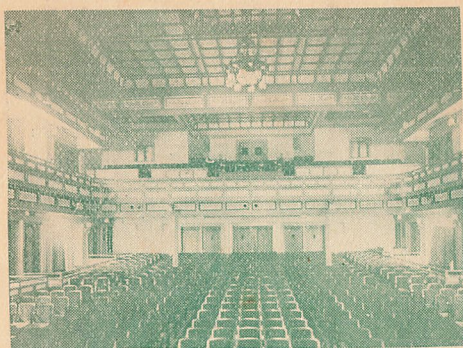
前賣切符専用電話南四七二番
電話南 七四〇八番
三七八八番

涼しい設備
御經濟的な

大阪の宴會劇場の

「文樂座の御宴會」を

御利用下さい。



金參圓五拾錢 (御一人様)

御座席は……一等指定椅子席

お食事は……皆様本位の定食

お寫眞は……お揃ひの記念撮影

番 附……床本と總配役付

お申込は 二十人様以上を承べります。

お寫眞は 終演と同時に お持歸り出来る様速成
いたします。

お申込は お場席其他の準備の都合上五日前に
お願ひ致します。

お申込は 文樂座事務室へお願致します。

お電話は 南四七一・三七八八・七四〇八番

美を増し 美を増す

クラブ白粉

日ヤケ止めに 粉白粉下に

クラブ美クリーム



色桃・色水・色肌・色白